

川柳塔

昭和四十二年一月二十九日 第三種郵便物認可
昭和四十七年四月二十五日 印刷
昭和四十七年五月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷五四〇号



No. 540

特集 — 夫を語る

五月号



豚饅・焼売・焼餃子

大阪・なんば



TEL (641) 0551~2

出張販売店

なんば高島屋/虹のまち鹿鳴/心齋橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋
京阪デパート/堂島地下センター/弁天阜頭支店/中之島サン・ストアー

国立公園 奥新和歌浦

・雑賀崎



国際観光旅館

うおまた
魚又楼

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3 5 6 4

誇る
海岸美を
風光明媚な

胸張ってすなわち新入一年生

情報過多だんだん気乗りせぬ返事

冷戦の構えに春の陽が崩れ

倅せがせせっこましく干からびる

哀しからずやドーランのまま街の陽に

中島生々庵

朱の鳥居

庭の藤棚の芽が大きくふくらんで来て、土に恵まれない都会でも春の魁が胸に迫る思いである。心なしか高層ビルにはためくシンボルの社旗でさえ春の感覚を伝えてくれる。ふと目を移すと社旗の蔭に朱色も鮮かな鳥居が見えている。近頃こそ忘れられたような存在であるが戦前にはあちこちのビルの屋上に見られたものである。好奇心も手伝って大阪市内の目抜き地域を高速有料道路で回って見た。ところが私の予想よりも意外に多数の鳥居が赤く祀られているのが見えた。宗教心の

薄い私にとって屋上の赤い鳥居がなにを意味するのかよく判らないし、また社を象徴する社旗とこの鳥居との間に何かかわりがありそうとも思えない。しかし考えてみると、我が道を往く強い心意気を屋上高く掲げ乍らそのシンボルの下で激しい人間の営みが心にくい迄に揺れ動いている。

こうした一つの旗印というものが私には遅しくも尊い姿として感じられるのである。私達の胸に寄り添うバッジがちかちかと光る時のように。

座右の句

人はみな善なり向かい合ったとき

(緑之助)

私の句

手をつなごなんて結局みな孤独

中川 晃男

川柳塔五月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

朱の鳥居

中島生々庵 (1)

「津軽」の川柳

工藤甲吉 (2)

川傍柳初篇研究

(百六)
前田喜代人・故岡崎重義・清川端・柳風・故高須唾三味・丸

博美・藤井和雄
十府・岡田甫

(20)

最後の脱出

東野大八 (22)

面接試験

北川春巢 (39)

川柳塔(同人作品)

西尾菜選 (4)

近作柳樽

菊沢小松園選 (30)

路郎の俳句

香川酔々 (40)

一分間の柳論

正本水客 (41)

秀句鑑賞 (同人吟)

浜田久米雄 (24)

(近作柳樽)

正本水客 (25)

近詠

諸家 (45)

「津軽」の川柳

工藤 甲吉

みちのくの五月梅桃桜咲く 不浪人

五月に入ると、北辺「津軽」は、梅、桃、桜に続いてリンゴがいつせいに花を開く。この花の色は、うっすらとくれないを帯びるが、ただ見た目には雪のような白さ。

ところで、津軽十萬石の城下で津軽文化の発祥の町「弘前―ひろさき」は、この美しいリンゴの花に囲まれた「桃源郷」。豊臣時代大坂にも屋敷を置いたという初代津軽藩主為信の三子で二代藩主となった津軽信枚が、寛永年代つくらせたという古い町であるが、私はこのほど、この町で「春興摺―しゅんきょうずり」というものに初めてお目にかかり、それが機縁で、昔、津軽にも津軽の「柄井川柳」がいたことを初めて知った。

辞典によると、春興摺とは「新年俳諧をなすとの集り、其吟詠を板行して知人に贈答すること、之を春興の句といふ」のだそうで、いわば昔の句会報といったようなものだが、その中に「明治八年草々庵社春興摺」という

川柳五十三次：(二十)……………富士野鞍馬……………(40)

「北はま」におもつ……………菊沢小松園……………(46)

集 夫を語る……………竹中綾女・垂井千寿子……………(2826)

特 子どもは主役……………堀江芳子・高杉千歩……………(42)

雅号ぶつちやげばなし……………河内天笑・小谷葉子……………(42)

きのう・きょう……………不二田一三夫……………(42)

白浜よいとこ……………岡崎祥月……………(6359)

初歩教室……………小野克枝……………(47)

大萬川柳「感謝」……………本多柳志……………(51)

柳界展望……………香川醉々……………(51)

本社四月句会……………本田恵二朗……………(50)

各地柳壇……………川村好郎選……………(52)

「変人」……………(薫風)……………(54)

「ラーメン」……………(庸佑)……………(56)

「底」……………(文秋)……………(60)

「交人」……………河原みのる選……………(48)

「交人」……………西岡洛醉選……………(48)

「交人」……………太田良子選……………(49)

「交人」……………(二三夫・葉子)……………(65)



のが一点(枚)あった。

草々庵といえ千葉草々庵(一八三二〜一九〇〇)のこと。弘前の俳人で、俳諧は三谷句仏から譲り受けて二世の句仏を称え、前句は樋口木猿舎に学んで二つとも津軽の第一人者であったといふことは、かねて敬愛する津軽俳諧史の研究者、東白光氏から聞かされていたが、この日、その人から、この草々庵が、津軽に於ける川柳の祖ともいふべき人であることをさらに知らされたのである。

それは、明治十七年発行、落花坊(草々庵)先生校閲、白露庵先生編輯「狂句太郎」の序文に「落花坊先生の狂句たるや、津軽狂句の古ひを脱し、専ら川柳の新らしみに出、県内は言を俟たず、他県乃至北海道に至るまで、此狂句の道に遊び、撰を乞ふ人日に殖月に増加して、幾百人と言ふを知らず」とあるという一事。

かねて、それとなく青森県の川柳の歴史を探っている私は、この日、意外なもうけ物をしたわけであるが、あれやこれやを考え合わせると、北辺「津軽」の川柳といえど、単なる漂流物?ではなかった、と知り大いに氣をよくしている次第である。

★前号座石の句―考えを直せばふっと出る笑い―(伍健)と訂正します。



西尾 栞選

宝塚市 傍島 静馬

宿命のように長男お人好し
病気でもしなけりや息子ら顔見せず
おそろおそろ出したオカラがお気に召し

天神さんの護符もしんごい狭き門
組合が値上げしよりましたと散髪屋

松原市 谷垣 史好

この家は犬も虚勢をはってるよ
むくつけき男の顔にある愁い

夜桜は妻に云えないひとと行き
春宵や惚れた女の生ま返事
ようこそとばかり下田は涙雨

島根県 堀江 正朗

顔のない暮しに生きる手のぬくみ

その渦の中の自分に厳しい目
お互に労わり合って腹を立て
妻といて何の不足が春の宵
人をみな信ずればこ今日の僕

倉敷市 本田 恵二朗

たっぷりと息吸い込んで笑え君
梅が香に古典の佳さをふと思う
完成は謙虚未完成は威張り
白梅が咲いててくれた旅帰り
ライフルへ水鉄砲で立ち向い

八尾市 香川 酔々

帰化植物殖える日本の棲み心地
野次馬の輪へ犬までもぐり込み
他所者が来て古里の春をほめ

日向ぼこ猫御近所の噂聞き

軍鶏を飼う家に馴染みの燕来る

大阪市 正本水客

雪霏々と梅の白さに負けじとす

私は土にかえりたがっていて雪小止む

来渋っている春へはいつてゆく足音

フロントガラスの反射に春が顔を出す

焼わかめ春を呼んでる色になる

倉敷市 小野克枝

春を着るたのしみ喜々として女

納得はいかぬが大きな返事する

証し欲しむらさきの炎の消えるとき

敵になる君の最後の手が温い

新聞の記事にくらべて子に感謝

岡山県 浜田久米雄

いつまでも退職金があると見え

飲む話できてその日を待ち侘びる

仕事着はもう一本を喫うて起ち

ありがたくことしも五月晴となり

ほどほどにすますつもりが唄になり

大阪市 大坂形水

小企業にゲリラ戦法という手あり

岡山の奥買っとけと土地のこと

夫と子を捨てた女優の出るドラマ

ふと爪が折れて老化を知るショック

眼を軽く閉じると春の風匂う

和歌山市 垂井葵水

親という悲しさコネの糸辿り

酒飲めぬ男に燠炉の火がゆれる

絵馬揺れて乾いた音が吹き抜ける

耳よりな話にふらついて来た自信

宿縁の不思議さ観光バスで逢い

大阪市 本多柳志

救急車たしかに右折した安堵

戎ばし無縁のピラを握らされ

ホステスも娘で座る終電車

申告書滑りの悪いボールペン

白浜吟行

お経より大蛇で稼ぐ道成寺

富田林市 岩田美代

京、地ぞう院にて(二句)

石仏合掌かたく凍てたまひ

ひしめいてまだ沈黙の玉椿

刃こぼれの庖丁で情性の日々きざむ

現実をコーヒに沈めひとり言

さしあたり憎めぬ母とは私らし

倉敷市 本田 八笑人

公式のない算盤がよく踊る

盆栽の諸行無常や花鉢

口紅の赤クレヨンも同じ赤

出口なき石垣を積む瓜が伸び

ピンセットでつまむ紙幣の重さかな

大阪市 不二田 一三夫

風はウソつきだから詩人だまされる

ヘンな水だナと魚よろよろ泳ぐ

土という字は十字架の下に寝る

寄席(二句)

三番夏あれが芸歴四十年

あの頃はお客も粋きな法善寺

豊中市 戸田 古方

けったいなとき失せものが見つかった

愛やおまへん大慈です大悲です

あさま山荘異聞

人質のおきてきっちり守らされ

ひとむかしまえなら万葉の桜かな

大阪市 市場 没食子

暖冬で性のリズムもつい狂い

横井庄一さん(二句)

うすい血に大和魂がまだ残り

生命とりとなる酒ならん今日も酌む
食うてチョン長兄という名を背負い

出雲市 尼 緑之助

春斗の話題に早い花だより

松江新大橋

環境を変えて新橋出来かかり

赤軍派の惨

これも人か赤軍と呼ぶ欠陥車

太陽を見ず谷間のライフル銃

大阪市 橘 高薫 風

默契やいまも仏法僧がなく

人妻の鬼百合活ける恋こわれ

一日の長を悪友ともとられ

龍の画のやや褪せて来て物凄し

青森市 工藤 甲吉

にぎにぎの手を役人はしぼられる

冬木立そんな暮らしもぐらされ

鼻穴の奥へ葱の香清々し

しわがれた乳房も俺のせいにする

尼崎市 黒川 紫香

立ち話犬はとうとう座りこみ

リングむく匂いで少し待たされる

月ヶ瀬から高山ダムへ

山低く見えて峠に雪が散り

水貯めてダムは静かな冬ごもり

岡山県 直原七面山

拒むどころか搦んで来る娘

ウーマンリブは我が家の伝統

曼珠沙華手折る人として無くしおれ

犬連れて散歩 破産者とは見えず

大阪府 山川阿茶

たのまれりや一つおぼえの和の字書き

薬師寺の塔何処やらでホーホケキヨ

仁術を算術にした厚生省

椿だけきっちり季節に咲いてみせ

大阪府 金井文秋

口癖もトレードマーク程に知れ

愚痴云わぬ女きびしい過去を持ち

席蹴って立てど続くは影ばかり

仲人の絶句かえって座がほぐれ

倉敷市 水粉千翁

ふるさとを見直す日々の山河あり

野に咲いてころの彩として朽ちる

子をかばう嘘が夫婦にひとつずつ

負けて勝つうしろ姿がたくましい

八尾市 高杉鬼遊

日溜りを見つけた寡婦を笑うまい

背で泣くおんなの背を見るものか

金はこう使えとローンに教えられ

寄りそうた頬で京都の雪がとけ

堺市 吉田圭井堂

かかる世も季節季節に花は咲く

貯め過ぎて世界中から村八分

法事さえ脱親類でよせつけず

噛み合わぬも道理ピッチの違うギヤ

倉敷市 小幡里風

フリージャの匂う日そんな客が見え

その中で僕も溺れている波紋

企みへ女器用に化けている

バラ色へ父母に背いた幼な妻

高槻市 福田丁路

愛情のかけらもないという親子

家伝薬半信半凝飲み続け

電柱のない風景に春霞む

頭文字だけの英語に悩まされ

高槻市 若柳潮花

陽かげでも仕合わせに咲く智恵をもち

燃えた日は言わず憎しみだけ残し

待つことに馴れて女も歳をとり

樓門の朱を抱くように松の青

門真市 福島鉄児

バスト一〇〇今にも圧倒する如く
ウエストを気にして胎教信じてる

ヌードカレンダー貫い筆筒にしまつとき

父を無視して母と娘の対話

鳥取県 鈴木村諷子

春の陽が障子に雀画きに来る

女房が正直者と言うてくれ

太陽のかがやく水に氷を播く

氷播けば水に楽しい氷のあり

大阪市 河井庸佑

寒風がさつとわが家を通り抜け

足もとをすくわれそうで落ち着かず

親友がどうしたとか右派と左派

せがまれて買ったピアノに悩まされ

松江市 恒松町紅

暖冬寒春新聞記事も膚寒し

直線に走り幸せフト感じ

双方に自由があつて嬉しい日

尻馬に乗つて上司に嫌われる

米子市 林瑞枝

早朝の会積へ警邏の目が優し

よみがえる童心故郷の海に佇ち

神域の雪踏みしだく帰省の子と

愛ゆえの別れつれなくする素振り

大阪市 小出智子

母の瞳にこの母鳥も苦労性

ふるさとの雪は臉の中で降る

風鈴が年中鳴っている情性

末っ子の理屈おだてに乗つてこず

大阪市 河野君子

いたずらに春を探る掌冷えてくる

くさり編みが続くよ夫婦の足の跡

日蔭の花の定めと知らず春を萌え

ロビーで聞く世辞は調和の色となる

愛媛県 渡辺晁童

思案に余まり豆球を消す

メモ入れて十万円を妻に借り

字にすれば悠々自適老い二人

一本の柿の木さえも親ゆずり

米子市 八木千代

折紙の子の沈黙がいとしくて

ままよ生地のまままで通して親生まれ

愛される幸に素直なつめのいろ

旅ふたり別な想いにみかん剥く

東大阪市 宮西弥生

筆まめのある日は女の影を追う
だまされてみたい春の夜のグラス
炎えさせてあげたい女の思慕ゆれる
縄張れば夜桜媚びる道となり

笠岡市 木山遠二

読経のそれは音痴と思われず
金持たぬ身か法律にいじめられ
床柱の両脇 意見食い違い

身辺多難

老の身の起てど臥せれど気が疲れ
今治市 越智一水

わらを打つ老婆へ雪はまだとけず
反対のことはを返えず恋心
定年が迫る夜妻も醒めていた
下駄履いた散歩 無心の音を立て

鳥取市 河村日満

札幌オリンピック70mジャンプにて
君が代のテンポ日章旗へはやし

舞子にて(一旬)

窓あけて淡路がそこにある景色
せせらぎの音ふるさとを近づける
尻り馬に乗るわが性の卑屈にも

藤井寺市 西いわを

得心をした顔きへ不審が出
額縁の中で泳いでいる緋鯉
退屈な亀 のこのこと首を上げ
引力のあるのを識った椿落つ

松江市 舟木与根一

伸び伸びと育て別居されている
商売が下手でなるほど城下町
云い過ぎたこと庖丁の音で知り
上げ底の隅まで商魂行き届き

兵庫県 河原みのる

デノミ論猫パパ奨励する如し
地獄より先ずはお寺の沙汰へ金
篠山町蒸気機関車辞退
なだめるにオモチャがちいと大きすぎ

篠山線サヨナラ列車

長年の癖は踏切りまだ停止
兵庫県 遠山可住

老夫婦時計も好きなときに鳴り
オートバイ十八才の音で来る
善人とみたか妓も飲みたがり
金持ちどうしの短い話

鳥取市 清水一保

議案より人事でもめる浅間しき
孝行は望まずひたすら子を想い

小豆島にて

今日も又鐘の音色の絶間なく

我も又遍路と呼ばれる列に伍し

倉敷市

谷井扇水

全身で等しく耐えよゴムバンド

千人の味方に勝る母の声

淋しさを隠くす爪なら派手に染め

しきたりにこだわっていて伸び悩み

西宮市

若林草右

呼鈴へ判もって出る年の暮

この世よりあの世に友が多くなり

落ち葉にも居心地のよい隅があり

行儀よすぎてコスモスよそよそし

倉敷市

野田素身郎

自己過信だったここまでで定年

さりげない素振りでも恋心

洗濯に出せば寒さがぶり返し

斜め前の美人も一人喫茶店

大阪市

神谷凡九郎

人間なんだヨ牡と牡ではおまへんで

手をつなぐから二人のポーズです

川柳味と聞かれ人間臭さと答えたり
言葉あり心があって煩らわし人間

西宮市

島居百酒

青春に悔なく老残に悔残し

鉄筋になっても老舗のれん掲げ

友情を借り手の方がふりかざし

差し障る話盃で封じこめ

西宮市

藤村ゞ女

雑談にうっかり亡った口を悔い

片親の意地を背負って来た五人

あてられておって満足そうな母

紋服に母立って見座って見

堺市

高橋千万子

逢って来た余韻気づかれまいと脱ぐ

棲合わぬうそを許しておみそ汁

指かけた障子のかけに開けそびれ

ご自慢の料理に舌は妥協せず

守口市

羽原静歩

自問自答してルールに突きあたり

アイシヤドーおんなの業をチラリ見せ

鯉のぼり不倫の風は寄せつけず

石段を登る縁の手をつなぎ

新宮市

大矢十郎

眞実はソロバンに手が触れるまで
献血をしたという娘へだまる父
嫁ぐ娘は母に選ばず鏡掛け
姿見へ母久しぶり立って見る

貝塚市 野坂つき子

残り火へもいちど本心たしかめる
幸せな風かもしれず乗ってみる
古都をゆく女カスリがよく似合い
四面楚歌愛の糸は見つからず

東京部 増田次章

吾が家新築(二句)

実力のギリギリ小さな家が建ち
実感が沸かぬ吾が家で乾杯す
亡父の歳亡父の気持がわかりかけ
胸に手をあてれば俺もいい加減

大阪市 江城修史

傷心の涙は雨降る窓に向け
言葉なき労わり同じ過去を持ち
待たすだけ待たせ歩巾は変らない
春の風昂ぶる心のまだ老いず

竹原市 森井善居

さげずめば僕の心も汚れそう
阿責ひしひしと湖水の澄む日なり

四季が無い花屋で春の花をよる
マイカーの便利へひよんな落し穴

堺市 藤井一二三

銀婚式漸く妻の愚痴も減り
七十五日噂へ耐える曆裂く

勤務先解散(二句)

機械化の波に浮き草として暮し
生活も希望もコンピューターが変え

神戸市 小濱牧人

新人の初心に燃えて潔し

栄転と左遷の顔がバーで会い

エイプリルフルの恋が恋を生み

アルバムへ二人の愛を貼りつづけ

富田林市 木村弥栄子

スキャンダルまき諸々のピーアール

スピード感生きて行くにも心せき

つかまえてほしくて女逃げて見せ

忘却と云う復しゅうで得た勝利

富田林市 板尾岳人

惚れている山も女房も時に荒れ

女房に負けぬ魅力が山にあり

惚れている証抛人前離れてる

吸い付いた蛸は時々墨をはく

富田林市 浅川八郎

天気晴朗雑誌の活字線のよう

後姿何とお若い婦長さん

又安静今度は転んでアバラ折る

アバラ折り目下肺炎蔽戒中

大阪市 水谷竹莊

色街の恋はかつらを脱いでから

新婚を上下に別ける寝台車

富士野鞍馬氏喜寿を祝う

喜びは次の米寿を待つ元氣

岸和田市 高橋操子

おひなさまのつづみなりそう孫の歌

春の月ポストにしかと落ちし文

頂きマースみんな揃った灯もあかし

松江市 中川晃男

積雪消えてもとの醜さ

大学合格 子へ父の命預けます

みんな出た戸籍にもとの二人居る

大阪市 太田良子

さり気なく聞いて事実を確かめる

叱られる娘をかばい叱られる

核心へこれからふれる咳ばらい

下関市 国弘半休門

行動の老化へ五分進めとき

ローソクの最後は灰に成らず消え

其の子を育てて親の仇討ちに来る

京都府 大鶴喜由

たわむれに追えば女はしゃがむなり

上役のテストと知らず気を合わせ

忙中の心月雪花があり

大阪市 西出一栄

添え書きの一行にファイトよみがえる

沈丁のただよう部屋へ通される

雪ちらりお義理のように顔を見せ

桜井市 岩本雀踊子

精一ばい生きる女の嘘を見た

武器とする笑顔が魔女となる女

なぜ女ばかりをせめる流転の詩

神戸市 仲 どんたく

パートナーのように老人とコリー行く

顧問と云う名に拾われてながらえる

夫婦が夫婦らしくしたとリンチ受け

大阪市 天正千梢

蓄積のいとまもあらで渡り鳥

叩いてくれる本があり有難し

つきこぼしも多かりき五十年

酒飲めば重役なみの意見述べ
倉敷市 藤井春日

還暦の一と花咲かせて散るつもり
まっすぐに渡ろう阿呆と云われても

岩国市 弘津柳慶

バッテリーに似て五十の半ば過ぎ

冗談めいた皮肉で小心な男なり

雪チラチラこれで山陰らしくなり

大阪市 児島与呂志

指細き兄嫁誠実過ぎる人

初めから反論持つてるきびしい目

ネオンの灯けものうごめく影もつれ

姫路市 隠岐不酔

停年にやっと廻った長の椅子

膝小僧叩いて社長に勝譲り

譲歩して入れて通した但書

宇部市 石川侃流洞

梅干を貼って明治は風邪に堪え

村境ここで予算の違う道

熱爛が好きで親父の気が強い

岡山市 大森娛句楽

栄転の報せ留守護理老いてゆき

ふるさとへ錦を運ぶ光号

風紋の或は雲に波に似て

松江市 岡崎祥月

疲れてる心を癒やす酒がある

妻の目と子の目孫の目俺を乞う

ギャンブルを好まず金に縁うすく

香川県 三井酔夢

ホテルからホテルへ受験生とかや

リフト孤独砂丘に落ちて行く親子

老いがめいり込む砂丘走れない

大阪市 木村水洞

二男二女みな凡人の倅せさ

ささやかな贅沢長屋の植木鉢

箱根、熱海

浮気する度胸もなくて一人旅

倉吉市 奥谷弘朗

引揚げて自分の家がやっと建ち

双肩の口ほどにない肩の中

妻だけが父ちゃんと呼ぶ不幸せ

伊丹市 小川静観堂

石橋を叩いてこんな女にけつまずき

なじかは知らぬど忘れじの深淵

折角の高価薬と飲まされる

大阪市 有信新之助

広中のタイ好きになれぬ柄ばかり
最初だけ酌いでもらったカウンター

戦友を訪ねて

半生を語りに伊豆へきた無沙汰

大阪市 福井野迷路

国民を人民にする荒行事

長話遂に核心には触れず

ブーツ脱ぐ孫のふくらみ胸豊か

広島県 高橋 鬼 焼

新社員廊下の艶がものたらず

対決をさけてしずかにコップ酒

ペンだこよ明日をささえる記事をかく

宇部市 平田 実 男

幸福さ時間よ止まれと叫びたし

クレヨン画個性画用紙からはみ出

野次馬がつまらさそうに散ったボヤ

京都市 都倉 求 芽

雑談の隙間をにらむ眼を感じ

平凡な支出が続いている平和

いとおしかったことさえ煩わしく今は

松江市 小林 孤 呂 二

春の陽が動く耕しの振る鋏へ

あれだけ口うごかし金魚辛かろう

差引かれ五桁暮しは向いてこず

松江市 柳 楽 鶴 丸

適令私には重い荷物です

平々凡々これが性に合ってます

割切っている素顔ならそれでよし

京都市 松 川 杜 的

俺にそんな顔があったか幼児笑いかけ

石仏百態猛宗竹の青に坐す

順路逆さにゆっくり廻る庭園美

岡山県 横 山 一 声

風邪薬風邪をなおして胃をいため

品質を知らず値段で判断し

趣味ですする内職なのに肩がこり

大阪市 宮 尾 あ い き

初雪をよんどころなく下駄がふむ

永病の夫暴君を守り抜く

8ミリの花嫁病床の父へ笑む

美禰市 安 平 次 弘 道

仏教の墮落院号も金次第

春一番入試を終えた子の寝息

飛躍への雌伏とスランプにめげず

松江市 吉 岡 通 児

長男という足枷が過疎に生き

郷土出身という肩書きが三段目
たまさかに鏡よ嘘も見せてくれ

岡山市 光好陽子

金と暇あるのを運んでくる「ひかり」

どこからも電話もかからぬ日の長さ

春風に頬くすぐられ衣替え

大阪市 飛田好一

寒椿訪ねる人の少なうて

遠い日の祖母と来た道孫と往く

断酒して

酒飲んだつもり of 土産買う

大阪市 吉岡美房

阿呆かいな心にもない別れする

無茶でっせ言うて井池まけてくれ

師の句集春の日射の中で読む

堺市 伏見茂美

くらべてる女同士の宿浴衣

拝観のお庭に野花ある風情

帯解けば忘れたことの多すぎで

大阪市 川口弘生

鶯の鳴き音も馳走の御本陣

本陣の朝のしずけさ蜆汁

ずどぼっこおえるもんかと新幹線

娘の骨を埋む（一句）

大阪市 中川滋雀

また来ると祈った墓地をふり返り

同郷のよしみに迷惑酌きにくる

芸術と自負し職人とも卑下し

岡山県 池田古心

丹尺へ震えのやまぬ筆を取り

口に出す恐さが胸を痛みつけ

楯突いた後千振りの味がする

鳥取県 川崎秋女

ひとところ空け恋猫のかえり待つ

置炬燵猫の抜毛に春を知る

娘見に来たこの家の門構え

岡山市 川端柳子

精一杯だったよ過去は美しい

曲り角寒さに耐える胸を張り

めでたしで結ぶお話日向ぼこ

倉敷市 松下梁水

ある悟り俺を無口にしてしまひ

石ぼとけ庶民の顔で親しまれ

夕焼けの歌一列の影となり

笠岡市 松本忠三

食堂で食べればこれで幾らです

正直に馬鹿がついてる妻でよし
大師講師は長老格で祖母

島根県

小 砂 白 汀

ここもまたこのクモの巢待ちかまえ
噛み合わぬ歯ぐるま錆びるほかはなし
風花はかなし口づけのごとはかなし

岡山県

出 原 敬 一

自嘲して夫につくす性も愛
姉女房おかしい程の若作り
いたずらは叱って甘い眼に戻る

鳥取県

森 田 布 堂

公害は陸海空と攻めて来る
タンポポやすみれの路も塗りつぶし
玉碎もせず赤軍は捕えられ

平田市

久 家 代 仕 男

灯ともしたように日暮れのザボン畑
衣食足って礼節も無い世相
せち辛い地球と知らず土筆の芽

鳥取市

小 林 由 多 香

行詰まり抜けて自信をとりもどし
忠告をいま悔いている行詰まり
ネクタイをゆるめ夜汽車の人となり

愛媛県

村 上 旭 童

マスクしてやっぱり会いに出かけたり
流感に枕並べている飯場

公害もあるがやっぱりいい日本

笠岡市

木 山 要 次

自己過信入れ歯をしたり髪も染め
鯛焼きが急ぐ歩巾にまだ冷めず
老婆の疲れし軒背で聞く

和歌山市

野 村 太 茂 津

欠点のない活け花にしてもの足らず
立閑に花活け訪れを待つ妬心
花の美がわかった余裕詩心湧く

奈良市

宮 口 笛 生

晚酌の一本あしたへネジを巻く
会長という貧乏籤を引き
酔えば出る心の隙を捕われる

大阪市

西 川 誓 二

ちぐはぐな心にさせる旅の雨
事実を事実として見る勇氣
年老いて刺身のつまに甘んじる

姫路市

村 上 春 巳

宮仕え四十の厄に鞭を打ち
人を恋う鳩よお前は幸せか
六地藏子供が運ぶ春の唄

芦屋市 丸川初甫

チャンバラは時代を越えて生きつづけ
世に馴れて濁す言葉も堂に入り
出張は春一番の雨に濡れ

倉敷市 竹内翁童

背のびした日みじめな日記書く
最後の期待へ電話出てくれず
虚勢それから深いみぞとなり

生駒市 草深醉升

坊さんの集いねちねち意見が出
信心の目には奇蹟として写り
先祖の地マンションになりカーになり

呉市 植田英詩

風花のやがては酒を汲む誘い
握手する毘へマダムは笑っている
メロドラマ妻の臉に光るもの

香川県 岡田拳法

大計は苦手で道を掘り返し
わがへまは償却ずみと思いきり
敵の敵は味方と米中会談し

島根県 大森孝華

膝に来る孫に雑念吸いとられ
母にだけ見せたい涙駅に待つ

それぞれに嫁して炬燵の座がさびし

八尾市 飯田悦郎

異様な寡婦の魅力が引きつける
閑あり過ぎるからあちこちが痛み
がんじょうな握り拳は瘦せている

鳥取県 谷無閑

其れ以上聞かれてならぬ科をもち
如才ない男カバンを持ちたがり
職安に来ればまだまだ若い組

宝塚市 中村ゆきを

働き蜂でよし今宵も酒うまし
将来性あるといわれて不合格
逃したら縁ない八卦におどかさ

守口市 村田瓢太

たかが風邪ぐらいに仰山薬くれはった
梅どころが入試祈願の天満宮
雲の色に近づく春の兆あり

東大阪市 斉藤三十四

二十貫再就職の邪魔になり
孫と寝て兵隊話せがまれる
横井さんと同じ年です軍曹です

青森市 織田可津春

たった今だけに酔ってる眼を叱る

疑えばきりなし両の掌で受ける
さみしくてならない夜を女つくる

小松市 馬場魚山

職人の誇り家具部を素通りし

各地共予報裏切る冬でした

誠首のかけで課長の辞令受け

尼崎市 高津徹也

大小をやはり気にする子の世界

敗因は君の心に聞いてみな

告白の瞳と弁解の瞳は違い

大阪市 室谷徹舟

自動ドアうっかり踏んだ雨宿り

グアム浅間ニクソンマスコミ忙しい

仲人に熱いとこ見せ礼に来る

大田市 藤田軒太楼

つけまつげ男の誠意汲みとれず

消ゴムで済む失敗は高が知れ

確信のないまま渦中に巻き込まれ

大阪市 今西章雅

子の結婚

恋愛結婚結婚納親が納めに来

子の結婚別居の家を先ず捜し

結婚写真借衣装と見えぬ豪華版

人忘れこんな所が母に似て

北斎、広重展を見て(二句)

素晴らしい綿絵江戸を見せてくれ

カタコトがキッスシーンを見つと見る

島根県 中島英子

赤軍に昭和元禄虚を衝かれ

キッスシーン邪魔をしそうなつげまつげ

つげまつげ米寿の目にはお化けめき

高槻市 山田季賛

停年は近し子等の意見も聞いて見る

妻がだまるから我が家はなごみ

兵庫県 大江秋月

駅長の挙手で特急通過する

水道のカルケに金魚も住み馴れる

米子市 石坂新雪

後妻ほど見られ叱られるとも見られ

若いのに気分そこねたぐちで飲み

岸和田市 葛城伊三郎

だます前にだまされていた四月馬鹿

一ひらを散らして桜酒を呼び

東大阪市 竹中肖二

越境の学童ラッシュの揉まれぶり

青女改め

深夜放送多彩な裸体絡み合う

東大阪市

竹中綾女

沈丁花香り道行く足をとめ

諫早市

原田明春

日照権うばわれ転居考える

雪見酒芝居の舞台見る心地

大安へ巫女も太鼓もあがりぎみ

★

西尾 栞

男はんかてそうでっしやないかという老妓

午後二時三十分ブラックコーヒーの女とあり

信玄のかくし湯ときく朧月

温泉小唄どこも同んなじ四季の花

火元がわかって屋台のみなおし

菊沢小松園

同じもの作って百姓値をくずし

無い袖は振れぬ道理の伏目勝ち

窮鳥を殺さぬ程度に絞り上げ

待たされて見上げる星も凍ってた

弛んではならぬ心を明日へ寝る

川村好郎

成果遂に無し勘定書を待つ

沈丁花おのが香りにもう疲れ

気のかかぬ方は病後で逃げておく

もう何も云うまいすべて代がわり

点滅のネオンに似たる良心か

若本多久志

こころ乾く日々日曜の花作り

日曜の朝沈丁花こぼれそう

駅弁の情緒むなしく車中売り

秘書退社

思いやる一身上という都合

決別の言葉短し愛の巾

北川春巢

ゴールデンウィーク病院見舞客で混み

なるようにしかならないにせざる

出勤時間変えれば違う美人いる

出稼ぎは昔もあつた峠道

値上げする側もしんどい話きく

感 後 選

今月は赤軍と横井さんの句が沢山あった。私は決して時事吟をとらないというような偏見は持っていない。広い視野にたつて、句を拝見している。然し新聞の見出しめいたものや、報告川柳はどうしてもいただけない。

時事吟を投句される方は其の点充分注意していただく。

西尾 栞

川傍柳 初篇 研究

(百六)

前田喜代人 川端柳風
 岡崎重義 高須啞三味
 清博美 丸十府
 藤井和雄 岡田甫

631 下女鼻のくっすつ込ほどふとり

秋 紅

前田 下女は食べ物のよしあしにかかわらず、みにくいほどふとることになっている。「ぐっすつ込むほど」は、面白く要を得た表現である。巧みな句。
 すかしても下女つまむべき鼻はなし

一六六・12

岡崎 肥えて頬が豊かになれば、さなきだに高くもないだろう下女の鼻は、顔の真ん中に陥没することになるのは理の当然。つまらない。

藤井 含水炭素過食によるブヨブヨ太り、美容食なんて昔の下女風情には、とてもとでも。

丸 贊。例によって下女への嘲罵。
 岡田 かわゆるオカメ面。

632 大名のしづかに通ふる俄雨

眠 狐

前田 乗物や雨具の乏しい時代だけに、米

俵、酒樽のこも等をかぶって、一般には俄雨中を走った。

俄雨かけられるだけかけるなり 一一・17
 ぬれるよりましの考えこもを着る 一五・31
 酒樽のかけ出すやうな俄雨 安八社 6
 等の句の通りである。ところが大名行列となると乗物ではあるし、供の者は雨合羽を着、われ関せずで「しづかに通る」である

清 俄か雨にも少しもあわてないのが、大名の大名たるゆえん。
 藤井 供の者は常々、雨合羽の用意はしてあるから、俄雨にあっても早速着用して、少しもさわがない。行列はしづかに行く。

川端 贊。
 合羽箱どろく／＼とかしこまり 初 7
 合羽箱追つつくうちのかましまし 五・11

高須 佳句。庶民のものあわてふためく町筋をしづかずと通る大名行列。当時の感じがよく出ていて好ましい句。

丸・岡田 同。

633 江の嶋へ行くが種木の突はじめ

一 甫

前田 江の島は既出。種木は檢校のつく種木杖、黒塗、頭部は丁字形、鉦をたたく種木目に似ていて両種木ともいった。紫衣とともに許されてつく杖で、これには千金を納めなければならなかった。檢校になると江の島へお礼詣に行くことが習いとなっていたが、この句のように種木の突きはじめで、それをあらわしたのである。

大難所種木の杖を借りて越し 三三・43
 金が出来種木は京へ取りにやり 四五・24
 世の中に金のなる木は種木也 四六・7

藤井 勾当の時許されるのは片種木、檢校ともなれば立派な両種木、つき初めはお礼参りの江の島行きとならざるを得ない。
 丸・岡田 諸説贊。

634 御土産にもち能ひよふにこけん也
 前田 「もち能ひよふに」は持ちよいよう

水 砥

に、「てけん」は沽券で、土地家敷などの所有権の証文。嫁の持参として沽券状の意である。

目の一つあるが沽券のあて名なり一六・35 千両の沽券あて名はおつる殿 一六・31 清_二沽券とは「沽券にかかわる」など、人の品位を表わす言葉としても用いられるがこの意味は掛けられていないか。

藤井_二今なら「祝のため無記名証券もらふなり」であらう。

高須_二こけんは清氏のいう「沽券にかかわる」の沽券で、もとの意味は「売券」であるから、この句、持ちよいように持参金もすべて土地家作の証券にしたという句であつて、どっちにしても現代なら無税・免税というわけにはゆかぬ。

丸・岡田_二諸説贊。

635 駕昇が誉れバ雪もげびる也

前田_二「げびる」は品のわるい、下品。普通なら、一般が雪景色をほめても交にきこえないが、かごかきだと、職業がら下品になるというほどの意。平凡。

どっさりと降ると初雪げびる也 二四・6 雪空になると四つ手は景気上げ 玉2

岡崎_二雪が積つたことを理由に、とかく酒代を強請したり、割増しがちだからであるう。

清_二岡崎説に賛。暗に酒手の要求である。藤井_二同論。酒手はしさに雪をほめている

からげびるなりである。

川端_二贊。酒手の無心。

高須_二一般の人が「ああいい雪だ」というと景色なりムードなりをほめた言葉として上品にとれるが、カゴカキや何かが雪をほめると、かせぎがある下心が見えすいて下品になる——という前田説に賛。

丸 岡田_二同右。

636 中貫をめし豆腐やへいとま乞

用 弓

前田_二すでに出了伊達綱宗の豆腐屋訪問、伽羅の下駄でなくて「中貫」である。これは中抜草履のことで、ワラのシんで作り、緒わらに白紙を巻いた。そして吉原通いの者が好んではいた。句意はあきらか。

岡崎_二訪問でなくて帰りにある。難をさけて休ませてもらつた札に、伽羅の下駄は豆腐屋に進呈したので、かわりに草履をはい

て蕨邸に御帰還になるわけ。

清_二岡崎氏説贊。中ぬき草履については、「わが衣」に「下郎がはく物にあらず、武士、有徳の町人のはき物なり」とある。伽羅の下駄にしろ中抜草履にしろいづれも高

価なもの。

高須_二「中貫」は、「中抜き」で「あわぞうり」といい、シャレ者のはいた草履である。伽羅の下駄を豆腐屋にやってしまった

仙台公が、何で帰つたかの解答で、川柳家のうまい「めつけどころ」とはめられそうな句。

丸_二贊。「中貫」でこの人物を表わしている。

岡田_二同。

637 文使ひ枝豆売とすれ違ひ

一 甫

前田_二紋日の十五夜と同様、後の月の九月十三日は、遊女らはなじみ客に、さそいの文を送つた。枝豆売は当日食べる枝豆売りで、栗とともに枝豆は供物のひとつであつた。意はあきらかである。抄出句は十五夜

・十三夜の関連句である。

枝豆をつっぱって来る重のふた 一〇・9 月の座があいてなんすと文が来る 一〇・40 月に来てくれるだろうと封を切 七・27 後の月ひとり／＼にごみを出し 六・7

藤井_二贊。文使ひとは綺麗な句。江戸時代らしいのびやかな句。

高須_二紋日の誘い文も、枝豆売りとすりちがうようでは、少し手おくれではないかな

丸・岡田_二礎稿贊。

岡田 甫 著

川柳東海道 上

— 日本橋から大井川まで —
(付) 鎌倉・伊豆史跡めぐり

読売新聞社発行

定価 六五〇円

東野大八

最後の脱出

私がまだ二十歳台のころおい、大陸から内地の生家に帰省した時、上京して川上三太郎氏のお宅を訪れたことがあった。たしか、王子に先生が住んでいられたころおいだったと記憶する。近くの国電の駅まで見送って頂いたが、その道々の話に先生が

「君は映画が好きかね？好き！それならいい。映画は川柳のコヤシだよ。特に洋画のサブタイトルは、格好の新川柳のネタだよ」といわれた。三太郎氏を訪ねたときの記憶は古い事柄だけに、今は雲霧莫々だが、このことだけは昨日のように実に明確に頭の底が止めていく。

先生からの御教示をまつまでもなく、私の映画好きは、テレビ時代の当節とて少しも交らない。むしろ逆に、映画への執心が烈しくなりつつある。このことは、大陸の記者時代満映を担当し、そこに友人たちがいっぱい

たことにもよるが、戦後も新聞で映画の座談会に出たり、封切ものの評をしたり、ラジオの定時番組にレギュラーで半年間もひっぱり出されたりしたことなどで、一層極めつけとなったようだ。

前置が大分長くなったが、このほどアメリカ映画の「最後の脱出」というのを観た。西部劇の添え物番組で、作品としてもB級の下の方だが、このテーマは誠にショッキングであった。以下そのストーリーをおってみよう。

へき頭、オレンジ色の無気味なきのこ雲がわき上る。つづいて巨大な煙突が吐き出す赤い噴煙の林。黄、赤、青の工場のようにたれる濁水。その中に日本のヘドロで埋った海も出てくる。全世界をおおうこうした公害ビルルスによって、鳥獣魚類のいるいたる死臭を放つ屍がフラッシュバックで際限なく出てくる。

カラーテレビに、不安な顔のアナウンサーと、恐怖にひきつる対談者の顔が現われる。二人とも一語ずつに烈しい咳をしているのが異常だ。緑の地球は今やカッ色の地球と変じた。地球の九九％が公害によって侵され、もはや滅亡の寸前にある。中国では、三億の人間を核爆発によって処理し、その人減らしの政治的非常手段は、もはや各国においても常識的に実施され、大都市は昨日も今日も大型細菌爆弾が投下されつつある。飢死する各国民の数はすでに二十億を超える。テレビはそんな実写のカットを入れて、現況を紹介するのだが、アナと対談者はやがてつかみ合いの激論となり、フィッと切れる。

舞台はロンドンで建築技師とその娘の許婚者の若い化学教授が主人公だ。けたたましく無気味に電話がなる。寝巻の技師がそれを耳にあてると、さつと緊張して傍らの妻をたたき起し、電話器をおくなり、さあ、出発だ、とどなる。一時間以内にロンドンを脱出しなければ死を意味するのだ、と叫ぶ。

技師夫妻と十七歳の娘、そしてその弟。娘の許婚者の教授の一行が、やがてライトバン二台に分乗して深夜のロンドンを走る。その道々、暴徒がストアーやマーケットを破壊して掠奪している渦中に巻込まれ、鎮圧にかけつけた警官の出現で辛うじてそこを脱れ出るが、その体験から武器の必要を感じ、ある銃

砲店に馳け込むが、主人は証明書がなければ売れぬという。その主人を一発で殺した凶暴な店員と、その情婦が一行に加わる。一行の目的は建築技師の兄のいるロンドンから三百キロ離れた溪谷の農場なのである。ここにはまだ生きてゐる畑と牧畜があるはずだったからである。

カーラジオは刻々と暴徒の大会と交じたロンドンの非常事態を伝え、外出禁止、郊外への出口は軍隊によって閉鎖されたとなりたてている。一行は、やがてその関門に出会うが、警備が手薄と知って、兵士数名を射殺する。列車の踏切に行き合ふと嚴重に横木が下りてゐる。技師と教授がその踏切番のいる建物に向つてゐる間に、ヒッピー風の数名が自動車を襲ひ、技師の中年の夫人とその娘を白昼の街頭で凌辱する。連中を射殺してある村に入ると武装した村民に包囲され、車も食糧もすべて強奪される。一行は徒歩に移る。詳しく書いていけば際限がないが、一行は武装する集団化を図るため、枯死した村を捨ててさまよう避難民の一団と会い、そのリーダーを射殺し、そして凶暴なヒッピーの一団ファン族と死闘を展開、やっと目指す兄の牧場につくが、すでに半分は枯草の耕地で、これ以上人間がふえるとわれわれが餓死する、と一行の入村を拒絶。かくて兄弟が武器をとつて闘うのである。軍隊も上官を射殺して、兵

匪と化し、ロンドンでは内閣が戒嚴令を布くなり全閣僚は逃亡してしまふのである。

十七の少女は、凶悪な銃砲店の店員のいうなりになって、教養ある男前の恋人に言う。

「生きるためにはこの人の方があなたよりずっと頼りになる、愛とはなにさ」

法律も秩序もなく、野獣と化す全人類。腐り切つたリングの断面の如きドロクロを想わず宇宙の球体につきのナレーションがついて終るのである。

「地球人類のこの怖るべき飢饉には、もはや愛もなければ正義も存在せず、芸術とは、詩とは果してなんであらうか」

映画会社の友人はこのあとの茶房で曰く。「ジョン・クリストファーのベストセラーの『草の葉もない』の映画化だが、滅びゆくアメリカの映画界はもはやポルノも相手にされず、かわつてSFが受けている。それも人類の破滅、滅亡がほとんどのテーマで、ハッピーエンドくそくらえなんだ。いまあなたのみた映画の最後の脱出なのは皮肉だよ」

ポルノ解放などと今の日本は叫んでいる。動物的人間の生身のセックスの解放なんて、一体そこにどんなイデオロギーが在るといふのか。終戦末期の上海の四馬路―この中国文化の一面を物語る書店街の店頭は、姑娘の貧弱な裸の本で溢れていた。まるでニワトリのむき身のような寒々としたグラビアに、私は

人間の末期的たい廢のやり切れなさを味わつたものである。公害とポルノ―それをとり巻く底知れぬ不況感に、ニクソンと毛沢東は何を物語ろうとしてゐるのであらうか。

私はこのアメリカ映画の人類破滅の公害ドラマを頭におさめ、バスに揺られながら終戦直後の大陸の地獄絵図を頭に描きつづけた。

北満開拓地のあの惨状。集団カリ自殺、掠奪強かん暴行の限りをつくす暴民の魔手を脱れて、さまよい歩く日僑の流民の群。真黒い手で引き裂かれていく日本婦人の白い裸身、泣き叫ぶ子供、声もなく行倒れていく老人たち。この公害破滅映画は、凶らずも私のそうした絶望虚無のかつての日の死の刻をまざまざと想ひ起こしてくれたのである。SFでなく現実だ。暴民たちの喧噪叫喚怒号の中に全くのところ詩も芸術もなかったのである。糞尿にまみれた窮鼠のように、ひたすらに九死の底で生を追い求めるその痛しい足がき。私はこの公害ビルスで滅亡していく地球のドラマに、敗戦した大陸の邦人たちの汚辱の歴史を生々しく想ひうかべ、SFではない、現実にはそれはあったんだ、とくりかえさずにはいられなかった。公害ビルスの妖しき発疹、それはポルノ解放なのである。この映画はまさしくこれからの人類の行末を暗示している。最後の脱出、それは意外、宇宙飛行士だけのドラマかもしれない。

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

浜田久米雄

仲人の太鼓判ほど出世せず

小浜牧人

仲人の嘘を詠んだ句は随分あることであるがこれもそのひとつだ。ありとあらゆる面で見分けない相手が仲人の口によつてはめそやされて来たのでこうなつてしまつた。が予想に反してこの仕末は案外であつた。今更仲人をうらむわけにはゆくまい。出世せずと当世氣質がうかがわれる。

もて過ぎた夜はブスツとして帰る

河内天笑

もて過ぎるほどもてた夜はうれしから靴の音も躍っている。でも家へ帰つてからにやにやと含み笑ひをつづけていてはつい気付かれ、露見されては折角のたのしみがふつ飛んでしまふ。ブスツとしてがこの句の命、名表現である。

燃え残る火はネクタイを赤に換え

大鶴喜由

男の平均寿命は七十才に近くなつて来た。だから男は七十五才位から俺も年寄りになつたわいと思つてもよいとあるラジオドクターの話だつた。だから年をとる程派手な服装をしないと言ふ。燃え残る火は情熱であるが故に赤いネクタイでこの火を消さぬようにしたいものだ。

古くとも国旗はわしが出すと決め

吉岡美房

子や孫が沢山いても祝日の国旗は俺が出すのだ。子や孫の手を借りないとする老いの身の一徹であり誇りである。祝日の朝そう考へて見上げる空の青さに心が溶け込むのである。老人の心の豊かさが表れてうれしい。

泣きすぎる女が通夜に来て白け

八木千代

通夜の席はしみじみと故人の追憶を語るのがよいと思つし時には亡き人を偲んでも涙ぐむのも致し方あるまい。だがあまりにも悲しみの挙句泣きつづける人が訪れるのも困つたものだ。女心の純情もほどほどのもの。異色ある取材だと思ふ。

マイペースこのままでよいねじを

巻く

高橋千万里

このねじはマイペースをこれ以上上げないためのねじで毎日相変らぬ歩みをつづけてゆくためのねじである。一見平凡に見えるかも知れないが平和な心境が滲み出ていて奥ゆか

若本多久志著

「親ごころ・子心」

送料共 二八〇円

「老いの坂」

送料共 五六〇円

しい限りである。

出前二丁しんどい階段昇らされ

森田布堂

ユーモアに溢れた句、電話がかかればたとえそれがうどん一杯であろうとそこは商売柄やむを得ない。それがビルの何階であろうと運搬しなくてはならない。運搬賃を原価計算して見ると大したもうけにはならない。しんどい階段を出前一丁が黙々と上つてゆく。

去るものは追わず梯子酒ひとり

小林孤呂二

二次会までつき合つて来た飲み仲間だが三次会には姿を隠した。しかもなお梯子酒はひとり進む。ほんとうに酒の好きな性分であり梯子酒の醍醐味を知る人だけがわかる句。

なるようにしかならないと今わかり

河井庸佑

何度もそんな目に会つて来るとこの悟りが開けてくる。川の流れには逆つてはならぬ。

近作柳樽

秀句鑑賞

—前月号から—

正本水客

小言飲み込んでも血圧上がりそう

堀江芳子

病後の恢復に懸命で僅かのことに、ひどいじんま疹が出たり、呼吸困難をきたしたりする句主にとって、小言飲み込んでもとは心にドキンとくるような切実さがある。

空気がうまいだけで青年生きられず

阪上 十止庵

母が達者でいた頃、大阪から半時間ほどの箕面で電車を降りたとたんに空気がおいしくと言っていたのを思い出す。しかし空気がうまいだけでは若者は生きてゆけない、何気ない言葉で鋭く過疎の問題を突いている。

さりげなく廻してみたい壺の花

榊みどり

活け花に心得のある人柄がしのばれて好ましい。

手を振って公判廷に入る背広

堀口 欣一

自己の主張に昂然と胸を張っているのか、心をカムフラージュしようとして所謂いいかっこしているのか、現代の風俗をとらえている。

うらぶれて隙だらけなり冬の蠅

脇本 政己

暖房が行き渡ったせいか真冬でも蠅の姿を見掛けるが簡単に捕まりそうで精気がない、隙だらけとは面白い。

振りむけば私は母の視野にいた

大峠 可動

満天下の耳目を集めた連合赤軍の吉野雅邦も条理ある母の涙の前に遂に折れた。母の視野にいたは適確な言い方である。

濃霧欠航四国矢張り島だった

原田 輝親

岡山まで新幹線が延びた、大阪から3時間などと言っても濃霧ともなれば四国は矢張り島である。夢の架け橋の実現を句は強く望んでいる。

束の間にみぞれにかわる戎橋

高杉 千歩

特に戎橋に限った情景ではないが、こうリズムよく句にされると戎橋の感じが何となく出てくるから不思議である。

陽だまりへ猫は昼寝の場所を変え

高杉 力

陽だまりにのんびり伸びていた猫が陽の移りにつれて何時の間にか場所を変えている。見ている方も長閑なひと時である。

平社員 一直線に睨まれる

三宅 亨

一直線がまことによく利いている。使う人なく持ち帰る五ツ珠

小林 文月

会社勇退の前書が付いている。老兵は消えてゆく日の哀感であり、その後に残るのは四ツ珠の算盤しか使われない世代の違う人達ばかりである。実感でなければ詠めない句。

三度目は呼び捨てにして振り向かせ

野呂 杜月

久しく会わない友人か、昔の同僚でもあろうか。すこし疎遠になっていた親しさが、三度目の言葉に実によく出ている。

西出一栄句集

「ねっくれす」

送料共 六〇〇円

西尾 葉著

「水鶏 笛」

送料共 六五〇円

・特集・

おしどり作家

夫を語る

―夫クン読むべし・読むべからず

亭主関白

竹中綾女

昭和五年八月お見合いをして、十一月三日結婚。主人は廿六歳、私は廿四歳でした。

八歳で母を失った私は、十歳の時から、伯母の家である竹中家の養女として育てられました。

だから主人は婿養子と言う事になります。

早大出のお婿さんは、家の書画骨董商を継ぐ筈でしたが、興味を持たないので、両親はあきらめ、保険会社に就職。それも性に合わないとい、ペークライトの工場へ変りました。

戦争中は軍需工場だったのが幸いして、甲種合格なのに、戦争に行かずにすみまして、工場主の気に入られ、戦時中は工場長でし

たが、戦争が終ると、工場はつぶれました。一年ほど遊んで、四十二歳の時国税局に採用され税務署を廻って六十一歳で退職しました。

遊んでいては心細いので、再就職しました。が六年間で五カ所勤務先を変っています。

年が寄ると、今までのように、辛抱ができないのか、ちょっと気に入らぬと「やめて来たよ」と言うことになりました。

只今は、ヒサヤ大黒堂の秘書課に、席を置いて、毎日元気に通っています。何時まで続くことやら……………

綾女

採用の通知へ一瞬うるたえる

腰弁のお菜残れば気を遣い

年だなど疲れた夫思ひやる
規律あるくらしのリズム取り戻す
曲ったことが嫌いで、御世辞や冗談は言えず、気短かで、私には、すぐ大声でどなりま

す。(これは年と共に少しづつ直ってききます。) 家では亭主関白の方で何事にも真面

色紙短冊
書画用品

大黒堂

丹青堂

セウセニ・セニ

目で几帳面です。女関係の心配をさせたことはいない代り、優しい言葉を掛けてくれたことありません。

お酒が回ると、ニコニコとして、唄の一つも出します。

昭和四十三年、俳句や、川柳や、絵を、嗜んでいた実父(渋谷三時・川柳塔社同人)が八十九歳で亡くなりましたので、川柳の会へも挨拶に回りました。その折、句会の雰囲気魅せられたのが、川柳の道に這入るきっかけでした。

前から、一緒にできる趣味を持ちたいと思っていましたので、それからは、毎月五、六カ所の句会へ二人で行き、早や五年になりま

す。時には一人でいきますが、殆ど揃って出席しています。良いライバルでもあります。

その間、故白柳先生に、御親切に御指導頂き川柳塔の同人に推して頂いたのも思い出の一つになりました。

昨年九月東大阪市に川柳の会が無いのが残念だと、市役所の友人に協力して貰い、その後援で、東大阪市川柳同好会を成立させました。言い出し兵衛と言うことで、初代会長に選ばれ、何とか続けています。

暗中模索も良い所で、拙い句ばかり作り、お恥かしいことです。しかし句会へ出る楽しみは増すばかり、歩けなくなるまで、揃って句会へ出たいと願っています。どうかよろしく御願ひ致します。

社 交 家

垂井千寿子

おしどり作家……。こんな題を与えられるほど私達が仲良く見えるのかしら……。まだ川柳一年生の私が作家とは？と、とても面映ゆく、小首をかしげながらペンを取りました。編集部からの難題にとり組んでいる私を、横でニヤニヤ笑っている彼は、ひと口に言うたと若い頃からお酒を飲んで遊ぶのが大好きなようです。無口で、地味で、いとも気のきか

ぬ私とは全くの正反対。

彼は社交家で、世話好きときています。おそらく今の人なら、「性格の不一致」と言うことで結婚もしてなかったでしょうし、してあってもとっくの昔に別れているかも知れません。その上病氣らしい病氣もしたこともない、いわゆる丈夫でなが保ち型の彼に比べ、私は見かけ倒して体が弱く、結婚以来四、五回も入院生活を送って参りました。

人気者人一倍の淋しがり

学生時代から続けていたという「俳句会」へ出たり、それをダシにして遊んでいたりで……。やっぱり彼は淋しがり屋だったのでしよう。育児や健康のことなどにとりまざれて、フト気がつくこと、倦怠期になっていたらしく、彼が何だか遠い人になっていました。勿論共通の娘しい話題を失なっていました。

背かれた日も何気なく化粧する

夫婦ケンカ子は成長の目で見てる

愛憎の背中合わせを夫にみる

お恥ずかしいのですが、その頃の私です。何とか心の通う場がほしい。家庭外の生活を知らたい。これが私を川柳の会場へ足を運ばせたのです。だからとても「夫を語る」というこのテーマに添うことは不可能で、つい自分のことばかり書いてしまっそうです。皆さんのように好きではじめた「川柳」でなくこんな不純(?)な動機だったのです。でも一歩踏み入れてみるとこれほど面白いものはない、今では切っても切れぬ趣味となっていました。

月一回私方で本社から先生方においてを願ひ、川柳わかやま句会を開いています。この日は二人とも大ハッスルで、とてもたのしく遊んでいます。

早春の日射しと愛をこめて編み

陣子張り夫と心通う時

彼はとでも子供好きで、初対面のお子さんでも彼に抱かれると母親の方へ帰りがたらない位で、うちの息子や娘にもパパの方が話せると言っています。一面また親孝行で、結婚前「僕が今あるのは弱かった子供供の頃、母が口で言えぬ位の看病してくれたからで、お母さんは大事にしてほしい」と言ったのが、今でも私には忘れられません。それで今では姑と私は、

夫の浮気姑名案ありと言ひ

というほど仲良しです。

養子でもないのに母と妻が組み 葵 水

黄銅六角ボールトナット

及び特殊換物全般

合資 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地

TEL 06 3445-114

夜間 06 4400 八

そして何とかこのまま私達夫婦は川柳を心の通う場として、一生を送ることでしょう。夫婦とは死ぬまでわかないクイズ

傷痍軍人

堀江芳子

意地悪か年のせいだか早く起き 正朗
夕食が終ればころりと高野。朝は働きの者で通した亡母に似て、五時前からこそそそ動き出されると夜の遅い私はよく小言つきました。が、一昨年わたしは病氣してから電気釜のタイムスイッチの代役をしてもらいます。

それが終ると「大峰山」のお水を替え供え物をして錫杖を振りお勤めが始まります。東京傷痍軍人失明寮で訓練されたお蔭で手さぐりでぼつぼつ気まかせにやれば失敗はありませんが、雑音が入った瞬間一べんに勤が狂い自信喪失してしまいます。腕まくりして鼻歌で洗濯機を廻し掃除器を引きずり歩いてくれる夫の手元、足元から目は離せません。あせれば障子が破れ、額に傷やコブが、それでも手伝うつもりで気を張ってます。

光り欲しめて妻病む間だけ 正朗

患者さんの治療中も点字板はよく動きまわります。夫婦とはこんな小さなことでもめ 克枝

盲人の頑固さに輪をかけて四十四年五月、左眼球摘出後のひどい耳鳴りに老化現象とやらが重なり聞えにくい上に、力を入れて話せない私とほんの小さなことから話が行き違ひ、青筋を立ててプンと横を向いたら話かけても知らん顔。少し間を置いてコトコトお茶碗の音をさせると、甘党の夫は自分から来るわけにはいかず、むずむずして呼ばれるのを待っている子供っぽさ。句の整理してあげようと言えば笑顔に戻り川柳は妙薬です。

路郎忌その他各地の句会での感激は心の糧であり握手を大切にしています。私の句がよかつた時には自分のことのように喜び、涙もろい半面相手の顔色を見ないのでズバリ言うことが或る時にはマイナスにもなりますが、正しいと信じたら何と思われようと平気。

桜がふくらみ始めると指で確かめねば気がすまず、夏祭りには神楽「八岐の大蛇」の笛や太鼓で童心に返り、盆踊りの太鼓が鳴り出せば夕食もそこそこに「いい踊り手」ともてはやされた若さに戻って子供達を左右に輪に加わり見る阿呆から賞められて自信満々。火事のサイレンには人並みの野次馬根性も出て板土手へ駆け上がりたし、子煩悩過ぎても何かと要らぬおせっかいして首をすくめることも度々です。

この夫へ生きねばならぬ注射打つ 芳子
十二年前開腹手術二回、翌年上下の歯を全部抜いて骨を削り、翌年は開腹四回、やっと自信がつけかけた一昨年初、心筋コソク。せつせと稼ぐ夫を医療費で追いまくる「一

生の不作」の妻に病んでいることに対しては一度も不足を言わずお風呂の面倒も見てくれます。

芳子

何より楽しみの晩酌も全快まで絶ちました川柳のお蔭で泣き笑いの人生も楽しいです。

人生の傾斜へころげまいとする 一三夫

鬼さくら

高杉千歩

氣に喰わぬ雅号ぼつぼつ売ればはじめ

柳歴わずか五年、銀婚もすぐという暮らしを共にしながら、鬼遊さんにこれほどの情熱が隠されていたとは、ただもう驚歎のほかありません。

同じ趣味もって夫に逆らわず

の凡々の日々晴天の霹靂とばかりに四十年十月、川柳塔賞受賞のお知らせを頂き、嬉しさが多弁にさせる佳き日かな

と、この日よりますます精進するありさまはまさに遊ぶこと鬼の如く、

赤飯も炊かず佳き日をよそで酔い

朝星を頂いて勤めに、夜星の下を句会めぐりとは鬼もあきれざるばかりです。

近く高鷲亜鈍氏（藤村青一氏）のご紹介で「鬼の会」にお仲間入りさせて頂くと楽しんで

でおりますが、とにかく世間に鬼さんにゆかりのある方が多勢いらっしやることは認めなくてはなりません。鬼が嫌いなどと云うても敵わなくなりそうな大変な意気込みです。一家団らんのひとつときも、いつしか鬼さんのペースにまきこまれ、お互いに褒めるの三分、けなすの七分、

選句にあたって

西尾 栞

四月号から同人雑詠欄の選を、常任理事会の推薦で、担当することになった。先月と今月と二回選をして、つくづく思ったことであるが、雑詠欄の選は、課題吟の選と全然違うということ、選者の責任として申し上げたい。即ち、題詠吟は、如何に課題を上手に詠みこなすかにあるのであるが、雑詠吟は詠み人の、個性が何処かにひそんでいて、言いかえれば、その人ならではの詠み得ない句が欲しいのである。尤もその人、その人の特徴は、五年や六年の句作では生れるものでないが、十年二十年と作句している中に、僅か十七字の短詩ではあるが、にじみ出てくるものである。自分は、雑詠投句者の、約三分の二は、年齢職業をよく知っているが、残りの三分の

共感を句でつかみあう父子いて断絶の風に身を細めることもなく、これも川柳冥利と嬉しく思っております。鬼遊さんが人生の半ばをすぎ、はからずも得たこの道に心酔し、溺れてもなお求めようとする姿に、百までも生きてほしい趣味をもち

一の職業年齢をよく知っていない。できるなれば、投句箋に年齢職業を併記して戴ければ、この年齢にして、この職業にして、初めてこの一句を得られたということ、選者の責任に於いて、十分句主と対談できるものと考えている。

恩師、路郎先生には路郎先生の着想があり、表現があり、水客氏には水客氏の特徴があり、堀江正朗氏には戦盲という句が、即々と迫って来、白柳氏は白柳氏で、彼の持つ職業の句が一際冴えていることは、十指の指さすところである。

後世になって、蕉翁研究とか、蕪村句集評釈とかの本が出版されて、蕉翁二十七才の時句とか四十七才の時句とかと、年齢によっても違う句が、親切に評釈されているのを見る時、現在、選者の位置にあるものは、上面だけの句ではなく、また他者との句と比較して、善悪をきめるべきものでなく、その人の心境に入って選ずることが最大の義務と考えている。

その意味に於いて、私は機会ある毎に、地方に出向いて行って、作者と親しく談笑して

と祈りながら、たとえ、おしどりのように並んで泳ぐことができなくても、千歩、二千歩もうしろから従っていくつもりでいます。そして鬼ごっこならぬ「鬼さんどちら」とたずねながら、無理やりに添うてよかった今日の幸で結びたいものと希っております。

同人諸氏の心境を熟知したいと思っております。そうしてこそ、初めて選者としての責任を果せるものと考えている。私と未知の同人のお方は、許されるならば、投句に際し年齢、職業を附記して戴ければ、誠に幸甚の至りと考えている。

川柳塔社常任理事会

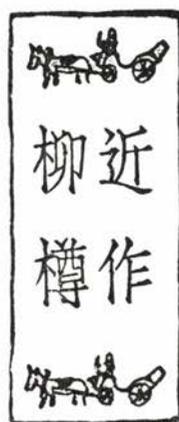
— 四月四日・六時 —

どういうものか常任理事会の日は雨空になる。六月十七日・十八日の「木曾路の旅」のプログラムができた。

本誌でおなじみの東野大八先生の柳話もたのしいが、島崎藤村の「夜明け前」第一行の「木曾路はすべて山の中である。で都塵を洗うのすがすがしい。」

戸田古方氏が手書きの句集を発刊される。氏の絵と書は定評があり、それも百部の限定版とあれば注文殺到が予想される。

出席 戸田古方、河井庸佑、本多柳志、橘高薫風、中島生々庵、大坂形水、西尾栞、菊沢小松園、不二田一三夫諸氏。



菊沢小松園選

竹原市 脇 本 政 己

少年にかえるすべなし雪が舞う
風呂に入るときに心を解きはなす
思ひ出はみな木枯が吹くばかり
兎をなさぬ夫婦童話が凍りつく
夢すでに遠のきコップの酒となる

大阪市 阪 上 十 止 庵

インテリの自尊ひと言多くさせ
事故あった日づけのままのカレンダー
統制のよさ踊り子の足揃う
老人に用なきネオン美しく
一生を被告の立場という養子

岡山県 嘉 敷 千 代 香

原爆忌昔の傷となる怖わさ
その義理へ押す実印が重たくて
顔色を伺う目鏡ふいている

夫に負け子に負けおんなの坂のぼる
激流へ流されまいとするあせり

島根県 堀 江 芳 子

静養の窓を覗いてくれた春
足音をみな聞きわける日を重ね
そのへんは夫に代って子に詫びる
たまに逢うようにいそいそ出迎える
もう少しまるみの欲しい受話器置く

守口市 岸 本 豊 平 次

禿たのも白髪も恩師に可愛い子
城壁の小さい石はただ黙し
人の後行くのに歩幅すら合わず
譬ばの話に俺が引き出され
気にしてはいないよとやはり覚えてた

大洲市 宮 尾 みのり
誠実な夫誇りともはがゆとも

夫からはみ出ぬ趣味でひそとおり
沈黙を破った方が敗けていた
プライドと意地が無視することに決め

岩国市 村 井 西 合

はじめからはなれるものとして育て
ためらわず素顔をさらす日記帳
嬉しい日かなしい日にも呼んでみる
わりきったつもりの頬に光るもの

大阪市 柳 原 静 香

都会に降った淡雪が童話呼ぶ
愚者一念他人の不幸はかえりみず
うっかりと買ったおもちゃで叩かれる
ためらいながら女は派手な方を選び

大阪市 黒 田 真 砂

春を着るパステル調の甘い彩
梅に佇つ女の性を哀れとも
満期近しへそくりで買う品定め

鳥取にて

冬濤に邪心捨て去るべく歩む

東京都 宮 崎 美 津 子

入試発表前後（二句）
落ちつかぬ親をなだめる受験の子
入試すんだかあの窓の灯ももう早寝

漬けるには惜しい一輪春野菜
おしゃれして行けば値ぶみか目が光り

竹原市 三 宅 不 朽

陽うらら土に坐りこむ縁談
文化屋のある日埴輪に見つめられ
釈信女散り敷く椿去りがたし
春愁の机上白紙のまま暮れ

島根県 錦 織 文 子

感謝する心に遠い世を嘆き
ひっそりと燃えてるものに藪椿
心貧しき日かんざし変えて見る
打診して燃えてはならぬ人を知り

吹田市 吹 田 三 郎

宿命を背負うてきしむ車椅子
二十二時女妬心をあみ続け
通夜へ来て他人がはじく弔慰金
雁帰る北に鬼哭の鳥がある

松山市 谷 の ぶ お

自転車よ君も大分古びたね
懐しいものに炭火で湯の沸り
焚火して爛にほどよい火が残り
瓜塗ってお米はとがぬ主義になり

尼崎市 中 谷 利 美

会社から言わせば俺は小の虫

男性としての意見を父に聞き

懸念した通りになった貸した金

背のチャック頼んで男よろこばせ

島根県 榊

みどり

しあわせよ平凡だからと嬉しそう

手のひらをかえす心の乱れ髪

縫い急ぐ晴着に春の音を聞く

かくし芸もたずひたすらつぎ廻る

島根県 榊

原 秀 子

淡雪を消してくれそな湯のたぎり

子と対話しました湯ぶね今一人

スリッパの向きへも母の愚痴がとぶ

断りの手紙はベンが重たすぎ

今治市 今

井 松 花

耳遠い人に釣られた声を出し

退職の頭は妻の刈るがまま

大臣のネクタイを見るカラーテレビ

非力でも動まるものに切符売り

八尾市 高

杉 千 歩

沈丁花と陽溜りの香に女いる

信念の靴音高く今日を生き

雨の窓辺で横顔が泣いていた

標準語きれいな女で切り出せず

大阪府 小 谷 清 女

満開は一足早い床の梅

お互いに嘘を上手にしまってる

気使うて話す言葉の計取らず

派手な柄着たり脱いだり一人言

大阪府 小 谷 葉 子

父逝く(三句)

妥協せぬ哀しい父のまめな筆

やり場なき身を木枯しにさらけだし

旅立ちへトボトボ亡父の杖の音

夕闇に響けまぼろしの宴なら

新宮市 川 上 久 司

僕だけの足跡残す道探す

ネオンまた男を誘う色で映え

鍵かけて女ひとりの顔を持つ

永見市 関 美 子

日々の挫折に耐える十七字

瞳の底で本当の愛がゆれてる

組しめてしめて花嫁出来上り

姫路市 大 原 葉 香

病床の窓から見下ろす人の群れ

一日の疲れ伏し目にふところ手

ドブ川がうつすネオンにくすぐられ

八尾市 高杉力

鍵っ子の鬼で終わったかくれんぼ

愛媛県 小笠原仲美

遠くから友の来そうな雨が降り

ふり向けば小さな嘘に出合いそう

竹原市 箕田浄美

問われてるサイズで指にはまるなり

指先にまでも女の白き線

ただそばに居させて欲しい肩をもむ

竹原市 生信笑子

窓を開けよう私の春だから

カーテンの裾が春の風にのり

通夜の客どれも後姿なり

松江市 内藤喜夫

忘却か逃避か旅にひとり出る

寄り添ってゆく悴せを妻が云う

愛崩れ女が一人職場去る

大阪市 塩満敏

大仏を仰げば落ちる鳩のふん

かけ足で牛乳・新聞やってきた

万国旗まだ中国の旗はない

和歌山市 垂井千寿子

せっかくの素顔へ青や茶の化粧

家計とは関係のない料理本

時々は脱人妻でいたい日も

金持っていないと見抜いた眼で見られ

出世せぬ夫でよかったとも思い

子のプランへ父のプランを引こめる

山口県 粟井さちえ

乗る人もなくて降り佇つ里の駅

娘居て新婚さんに目をとられ

冷戦は一先ず置いて送る朝

羽曳野市 大峠可動

日本の短所物価に教えられ

この道の音も豊かな鈴の音だ

人の心へ真心つれて私は歩く

和歌山県 南木宝子

バカヤロと言えるものならこんな時

標白も出来ぬ過去が浮いている

さびついて心のネジが回らない

岡山県 武元柳子

姉妹に貸借があり春のどか

日本が微笑するよう桜咲く

お花見の準備係りは忙しい

大阪市 堀口欣一

銀行の夜間窓口入れるだけ

春の海やはり油が浮いている

宇野重吉役者と申す顔でなし

豊橋市 鎮浪翠月

童謡が窓から春の外へ出る

整形で個性にあわぬ顔にする

日の沈む彼方に父母の住む故郷

東大阪市 落合思月

嬉しさを後姿にあふれさせ

忘却はうれし左遷の苦も忘れ

資金ぐり付いたかバツタリ寄りつかず

今治市 大本バット

つまずいて起きたら赤に交つてた

心臓は恋の始動の音で打ち

停電の部屋はずかしい事が出来

今治市 伊藤藤一郎

催促に行けば指輪の手をつかれ

焼芋屋のくせに美人にまけたがり

ニクソンに長城粉雪ちらつかせ

今治市 真山国彦

仲人の舌と足とで纏め上げ

京洛の巷昭和の軽井沢

食べられるゴミ野良犬に教えられ

今治市 古野伶人

色気には非ずマナーで髪を染め

気がひけたのか御主人の物も買い

残業をさせて車で送つて来

今治市 原田輝親

使い捨て親も祖国も学校も

箱書が贖物ですと云うてます

アンテナも傾いたまま過疎の村

守口市 野呂杜月

写生した絵から花の香こぼれそう

時たまに発言すれば急ぎ込んで

御先祖は正直者で貧乏で

島根県 安達潮音

Uターン故里の空へ親もいる

言い合つてみても二人は二人だけ

或る帰還

演出のうまさ汚辱の身を飾る

鳥取市 佐々木静泉

迷惑をかけて夜道の足重し

助かった奇跡へ父として叱り

好きという押しの一手に娘は賭ける

大阪市 白石潔

模範囚のようにひっそり病んでいる

病院の勝手を知って病み呆け

平服のナースの会釈にうろたえる

新宮市 大 矢 和 歌 子

なにげなく会った目と目が離れない

脱線のしないレールが敷かれてる

美しく飾った言葉で祝われる

和歌山県 ふきあげ 虎 城

宣告を聞いている吐息のなまり色

メーキャップを追って自分の顔忘れ

あきらめもついてドラマを見る時間

和歌山市 檜 村 ふ み よ

ゆうゆうとしてる無精をほめられる

影だけが黙ってついて来る夜道

新潟県 高 野 不 二

会釈かえして思い出せないまま別れ

忙しい中には飲める用もあり

竹原市 楠 貞 子

一对一で話せば善人ばかりなり

遠廻りした人生で恙なし

大和郡山市 森 田 カ ズ エ

時どきはオレンジ色の嘘もい

半ズボン脱げそうな娘が前に立ち

仙台市 川 村 映 輝

清くとも空気だけでは生きられず

ニセ医者に白衣着せればよく似合い

鳥取市 藤 本 佳 女

仲直りするすべも無し墓を撫で

子等育ち猫抱くだけの膝になり

鳥取市 藤 本 和 宏

意地張った肩をやさしい手がたたき

子をほめるお世辞保険へ加入させ

鳥取県 林 露 杖

定退は何かが失せるような日々

閑居してもう一言を飲み下し

大阪市 大 国 た か し

前向きで話の出来ぬ疵を持ち

初めから腹切る当てが名幹事

新宮市 川 上 純 滋

玄関の靴あちこちに別居させ

家計簿へチビたエンピツまだ使い

七尾市 松 高 秀 峰

棒グラフセールスマンを振り廻し

長男へベニヤで囲んで部屋が出来

松江市 興 富 喜 子

ちちははは草とともにある過疎の村

晴耕雨読ではたべられぬ六カ月

新潟県 市 川 周 治

暖冬異変豪雪地帯泣き笑い

ここからは入れませんと手術台

今治市 渡 辺 南 奉

妥協して心むなしく酒を増し

健康ないびきたのしく夫婦和し

羽曳野市 麻 野 幽 立

飲めぬから飾って心豊にす

嫁がせてから口数の減った母

大阪市 岡 本 まさひろ

法事より何着る着るで女もめ

筒先きを向けたテレビに身をちぢめ

大阪市 藤 田 頂 留 子

早買いを悔やまずピラが風にゆれ

ひかりは西へ又日本がせまくなる

島根県 岩 田 三 和

弱き者同士がなぜかいがみ合う

四二歳分解掃除してみます

鳥取市 近 藤 秋 星

春うらら蒲団でも干す他はなし

最初消した方の答が合っていた

青森県・波 ただお

多発するニュース耳目にはいりかね

非道にも山が墓場に交り果て

新宮市 城 丹 鶴

戦陣訓なみの戒律赤軍派

ガム島で生きよと木の実ぶらさがり

島根県 東 原 福 子

真実を知って倅せほしいまま

死後百年名作としてみとめられ

島根県 谷 岡 芳 枝

冗談がとぶ工事場へ雨しとど

母の気をくんで帰ると娘の便り

寝屋川市 福 富 隆 子

内職の部品も春をただよわせ

赤軍の親に思いをはせる雨

呉市 佐 久 間 文 明

土壇場になって孤独を知らされる

ままならぬ手の十字架を握りしめ

米子市 増 田 竹 馬

以下同文の中の一人で卒業し

折詰に配色と云う味を添え

鳥取市 両 川 夏 風

引き算が達者で家計簿行き詰まり

質屋から出してリ्यूズを巻きなおし

和歌山県 高 岸 龍 円

口ほどでないタラップ上る足

春の風呂ガラスに春と書いた指

松原市 玉置重人

陸橋の上当然のようにカンパです

歳月に甘え傷心消してゆき

愛媛県 小山悠泉

適当に遊べと先生まだ若い

めぐり合い貴様も俺も出世せず

羽咋市 三宅ろ亭

悪たれの子にもやっぱり親がおり

降参といっても孫は押してくる

大阪市 平井露芳

水着ショー男に見せるショーになり

喰って寝て横井さんより痩せて居り

藤井寺市 古結百水

引く波に貝殻コロコロついて行き

泣きごとに英語が混じるドル・ショック

釧路市 泉 きよし

独り占めしたチャンネルに歩を合わせ

激論の果て遮断機が降りたまま

新宮市 小林暢

回れ右していま一度すがりた

老婆のダイヤにまさる指のタク

堺市 栗本藤持

未来都市人は地下へと追い込まれ

母と子に毛糸のマリがよい対話

樫原市 岩井本蔭棒

古傷を突つかれそうで話題変え

犯人も巡査も飛び出す非常ベル

鳥取市 大塚豊生

にぎやかに帰ったあとを寂しがり

長女次女妻と私に似て育ち

寝屋川市 井上武松

レジャー好き今日も二等の船で行き

歳老いて抵抗とうに消え失せる

弘前市 小山内貞男

やりくりは寝ものの語りの小商人

雑草は雑草なりの生きる知恵

大洲市 堀内暁風

夜業の手 影はつきりとよく動き

労使とも主張を曲げずお茶も冷え

新宮市 熊野溪水

新築にしてからはやらないそば屋

理髪屋へ頭を預け寝るとする

泉佐野市 大工静子

紫のフトン貰うたが重床に

ゴールイン早過ぎ離婚も早過ぎ

高槻市 山田 スミ子

暖冬へ患者も医者も風邪をひき

鳥取市 藤本 鎮也

生理日の夫の意見に逆らわず

平凡な暮しを先輩が来てこわし

岡山県 山田 止水

八ツ当りデートの不首尾とは知らず

大阪市 鈴木 生仏

旧正の餅を左遷の町で喰い

備前市 武内 雅堂

水責めを赤軍の母じつと見る

大阪市 村島 秀村

すじ書きのない人生に跳らされ

高知市 竹崎 寛

神詣り春の坂道のぼり行く

大阪市 花田 繁子

笑おうとすれば笑える庶民です

青森県 岩淵 一星

愛情を知る嬉しさはたまの風邪

大阪市 今井 隼人

もうしかと大人になっていた背広

宿毛市 山本 窓花

竹割ったようなお人で名が通り

大阪市 内藤 ますゑ

目的のそこへ来てから思い出し

鳥取市 両川 洋々

テレビから流れる情報拍手する

大阪市 木村 濁水

柳友を見舞う

闘病の句ばかり増えたのを嘆き

鳥取市 有田 鹿の子

草木にも移植を嫌うくせもあり

大阪市 松岡 進

母と子の別れ

我がままも言って甘えてほしかった

鳥取県 福田 陽山

トイレ待ち観光バスはすぐにたち

大東市 広畑 賛平

銃口の前には金庫役立たず

鳥取市 藤本 恵子

若い者が留守ですセールスあきらめた

大阪市 本間 満津子

今は昔冥加と云うこと教えられ

面接試験

北川 春巢

面接者(私)「あなたは、なぜ看護婦になりましたかと考えたのですか？」

答、(一)「私は三才の時に大病をしまして、その時看護婦さんに親切にして頂いたのを母が感謝して、看護婦さんのような、他人のために奉仕する、感謝される職業がよい、と前からすすめられておりました。」

答、(二)「私は小学校五年の時に腎臓病に罹り、看護婦さんに親切にして頂いて治ったものですから、将来あんな看護婦さんになりたいと思っていたのです。」

答、(三)「私は、中学の時友達が盲腸で入院しました時、病院へ見舞いに行つて、看護婦さんの仕事ぶりを見まして、将来こんな仕事をしてみたいと思うようになりました。」

答、(四)「私は高校時代、男の友達が骨折で入院しまして、……以下同じ。」

面接者は、何度も何度も同じ質問をしなればならないのだが、返つて来る答は大同小異である。丁度、課題吟の選をしていて、類句ばかりを見るようなものである。

この春、看護学院の入学試験に際して面接試験を行なつた時の風景である。しかし考えてみるに、こんな問いを問われて、他に答えようがあるだろうか。句会に於ける川柳の作句とは違ふのである。答ははじめからほとんど決つてゐるといつてよい。他のことを答えた方がむしろ没にならうというものだ。それにしては、この問いは愚問だと思つた。しかし愚問とは分つてゐても、試験官は必ずこの質問をしななければならないのだ。

数人の面接が終つた時、私は気が付いた。面接での着眼点は、その答えの内容ではなくて、それを話す時の態度だの、ことば使いだの、あるいはまた、他の質問によつて、その人の常識だの、教養だのを見ることなのだ。他の質問にはいる前のウォーミング・アップの質問がこれであるのだ、と。従つてもちろんこの答だけで、合格・不合格が決まるわけではない。面接者は十人、数十人に、先ずこの質問から話しかける。一面豊かな役割を果す人間の群れであるのだ。私は面接を続けた。

入学願書にも、「看護婦を志望した動機」を書く欄があるが、そこにもほとんど判で捺したように、看護婦の他人に奉仕する崇高な職業に憧れたから、というようなが書かれてゐる。一時は、看護婦のあの白衣に憧れたから、というようながイメージに魅せられた時代があつた由だが、現在ではもうそんな感傷的なことはない。また聞く所によると、看護婦学校の「受験雑誌」があつて、面接に

際しての出そうな問題に対する模範解答や、看護婦志望の動機なども、こんなふうに見える、書け、というような記事が載つてゐることだ。

そんなことを聞かされると、「面接」などということは、何だか芝居をしてゐるような気がして来たのである。人が人を裁く裁判がむずかしいのと同じく、人が人に点数をつけることのむずかしさをつくづくと感じたのであつた。

面接者はその他趣味を尋ねたり、読書ならば、どんな方面の本か、最近は何を読んだか、どんな所に興味を覚えたか、どう感じたか、など次々と尋ねてゐつて、その人の看護婦に対する適性を見ようとするのだが、今度には中々口を開いてくれぬ。準備した第一問にはすらすらと答えてくれたのに、準備してゐない質問に対しては、迅速に応答するのはむずかしいのであろう。

予定時間のひとり五分が七分になり、十分になつてしまつて、面接者は次第に疲れてくる。試験する側もつらいことであつた。

以上が、この春経験した看護学院の入学面接試験の風景であり、感想であるが、要するに常識的であつて、一般的なものである。うやうやいなことを、適当にすらすらいつた人がみな合格、ということであつた。あまりべらべらと喋るのも、みんなの印象はよくなかつた。

面接にうっかりお母さんといひ 春巢

(本社副主幹・医博・看護学院院长・助産婦学校長)

川柳五十三次 (二十)

富士野鞍馬

41 宮

宮は今の熱田で、鳴海から一里十八町（五・九キロ）。熱田神宮の門前町であったから「宮」という。

熱田神宮は、日本武尊外四神が祀られておる。そして、

草薙はめぐみ熱田の御正体

杜蝶（八一三五）

熱田とはいえど氷の御神体

巨眼（八三二四）

と川柳にあるように、わが国三種の神器の一草薙の剣が奉祀されておる。

熱田明神に話題は多く、唐の玄宗帝をとろかした楊貴妃は、当明神の化身である。という珍説もあり、

日本にかまひなさるなと貴妃はいひ

（二〇二五）

玄宗は尾張詞にたらされる

玉章（四一三二）

楊貴妃も元ト神国の廻しもの

熱田明神を楽天知っている

（安七借）

——白楽天は長恨歌を書いた——

（安九仁）

などと川柳にも詠まれている。

また源頼朝は熱田大宮司藤原季祐の娘の子で、今にその産湯の池というのが残っている。義経はまた、奥州下向の途次、ここで元服したのであった。なお平景清は、大宮司の聳であったという伝説もある。

織田信長は、永禄三年（一五六〇）五月、

桶狭間合戦へ出陣に際し、熱田神宮に賽し、戦勝祈願をこめ、銭を二枚ずつ糊でくっつけておいて神前に投げて、祈願の通り銭はみなナメ（裏）の方ばかり現われ、一文もカタ（表）の方が無いのを見せて、神祐われにありと、士卒をばげまして、今川義元の大軍に勝った。という伝説もある。川柳にも、

かたのない智謀熱田の御賽銭

古鳥（四二二五）

路郎の俳句

香川酔々

「ふあうすと」三月号に、山頭火に学ぶと題する堀口塊人氏の文がある。その中に

麻生路郎は、俳誌「早春」の永尾宗彦や詩人野口雨情等、川柳人以外の短詩人とも交際していたから、おそらく俳句を試みたこともあったかと思われるが、その作品は知らない。とある。

恐らく路郎の俳句がどんなものだったかを知る文献は残っていないと考えられる。ところが、偶然筆者の目に止まったので、御紹介したい。京の古本屋で見つけたものが、手元に、麻生路郎編「大正傑作芭蕉句」という句集がある。川柳の句集と思ったので、中を見ることなしに、パッと買ってきて来て、家で開いてみると、なんと俳句集である。アレアレと思ったのは事実である。大正十二年発行、定価壹円二十銭、藤谷崇文館発行と奥付にある。

当時関西俳壇の雄で虚子と並び称された青木月斗を中心に、乙字、素石、別天楼、青々、句仏、龍雨、東洋城、禪寺洞等の名がみえる。まだ、現俳壇の大御所、水原秋桜子や山口誓子が登場する以前である。

なめかたで織田程勝たものはなし

(一九)

とある。「なめかた」という賭博があった。

「膝栗毛」に

弥次「とまりはどこにしよふ、錢屋か、ひやうたん屋か」北八「向ふのうちはなんだ、健屋か」

とあるように、川柳もまた、

錢屋を的に矢をつくは宮の船

佳雪(三三三)

と詠まれている。

ここは、東海道中最大の宿で、本陣二、脇本陣数戸、旅籠二百四十八軒もあった。次の宿桑名へは、海上七里の船便ということになっていた。その船賃は、文化年間(一八〇四—一八)の定めでは、

乗合一人 五十四文

むしろ一枚 三百三十八文

荷ひもの 五十四文

乗下一駄 七十二文

木馬駄荷 百三十一文

駕籠一丁 百六十七文

通し馬一疋 三百三十八文

増水は 四百二十五文

四十人乗一艘 二貫二百五十四文

ということであった。しかし「膝栗毛」には「此わたし船七里のかいじやう、一人まへ四十五文ツツ、其外駄荷のりものみなそれぞれにちんせんをはらひ、ふねにのる。」と書いている。そこで川柳は、

一夜鉾宮と桑名の人ごころ

鯨はこの金高つもる宮の舟

(武三三)

と詠み、船から名古屋城の金の鯨が見えた。この鯨は、慶長小判二万七千九百七十五枚を潰して張ったものである。

こうして宮から海上を船で桑名へ渡るのであったが、船きらいの人は「佐屋廻り」といって、名古屋城を右に見て、西へ六里歩いて、佐屋から木曾川を舟で下って桑名へ着いたのである。もちろんこれは遠廻りになる。

八劍の宮をわたらず佐屋廻り

一安(九〇六)

八劍の宮というのは、下宮ともいって、神宮の三町ほど南にある、宝劍をまつてある社である。

身が大事佐屋を廻りて御参宮

喜文(四六九)

佐屋廻りきちこきちこと頭痛がし

(拾二五)

大切な身ゆえに佐屋へまわる也

寒輔(五五五)

さや廻る連は話しもそりがあひ

美調(一一七二)

佐屋まで光る鯨銚の金目貫

乙(二二〇三)

鯨はこの目貫見にゆく佐屋廻り

有幸(四五三)

金無垢の目貫はさやの真正面

金魚(七二〇)

など、刀の鞘と目貫とを狂句に詠まれてある。昔の佐屋の絵を見ると、川舟乗場があった、立派な本陣も描かれてある。



鳴尾時代の路郎先生と霞乃先生
(大正十三年五月ごろ)

ふと思いついたのが、編者が路郎とあるからには、編者の句も、発見できるのではないかとことである。そこで一句ずつ見ていくことにした。一万句だから、かなりの数である。春の部に無し、夏の部に無し、大分探し疲れて来たところで、やっと見つかったのである。秋の部の終り(植物の項)の方に、二句あった。路郎の句

面会謝絶してばせを葉の昼

ばせを裂けたる朝の人恋し

同じページに、柳人として川柳革新を唱えた川上日車の句もある。

みず車の音にも芭蕉裂ける夜か

次ページに雉子郎(吉川英治の号)の句

工女出て秋草に日を貪りぬ

がある。

師の句は、この二句の他には、最後までなかった。自信の作であったのであろう。



5歳児が描いた自画像

子どもは主役

小谷 葉子

ワッペンを内の子句帳へまでもはり
 子には子の云い分がある通知票
 おしっこを聞いとれなんだママが詫び
 鍵っ子の無口がいきなり犬を打ち
 満三つもう始まっている入試
 子の図画は家より大きいお母さん
 珍客も子供にアトム見せられる
 つぶれないオモチャに孫がカンを立て

子の作文読んでも家に居てやれず
 注射の子その先生へバイバイし
 ワンワンがいたとお使いもどつて来

一水 庸佑 珠笑 峽一郎 庸佑 峽一郎 求女 一三夫 静水 静観堂 静水

都会の子遊ぶ脚下に土がない
 パパ起きて来ぬと子供が叱られる
 人不足子供みこしがはばきかせ
 背くらべをする子へ膝をまけてやり
 幼稚園もうライバルを作つて来
 少年の孤独が屋根に登らせる
 迷い子になるとは知らず子供の日
 迷い子も桜の下では泣かず待ち
 片言も云えぬに何をひとり言
 鍵っ子の淋しさ犬とひた走る
 鍵っ子の孤独十円握りしめ
 参観日やっぱりうちの子手を上げず
 犬の居ぬ犬小屋のこと子はふれず
 学校を早退してまで塾へ行き
 童心ふとネオンの街で母を呼び
 ママの柄着でいて迷い子すぐわかり
 うちの子が先頭をゆく鼓笛隊
 金魚鉢まぜ返してする三歳児
 子供等は妙な遊びを探し出し
 子は寝息をこからあすにする童話
 末っ子の不満は同じように分け
 女の子ヤッパリ母の味方なり
 末っ子が茶の間の人気独り占め
 陽溜りに鍵っ子一人忘れられ
 ける石もなく通学の行き帰えり
 泣かされへんかがイタズラのボスと聞き
 口答えする子の知恵がこわくなり

清生 好祐 青女 芳子 源吾 鎮也 露声 弘子 文秋 孝正 一路 素身郎 花村 弘道 瑞枝 静馬 形水 洪柿 きさ子 奇童 蘭幸 雀踊子 佳女 一路 魚山 拳法 九呂平

赤ン坊でさえ思惑があつて這い
 子の夜泣き盗難防止の役に立ち
 赤ちゃんもうす着にされた日のきげん

父ちゃんより偉くなれると苦笑させ
 ボスの子がボスになってた幼稚園
 鍵っ子の視線を追えば白い月
 手をつなぐ園児三ツ児のように見え
 三歳の反抗頭搔く事覚え
 菓子もろて金持ちの子の馬になり
 児童画の唯ひたすらのタッチなり
 鍵っ子にグチ聞かされる石地蔵
 抱けと泣く声だと夫婦ともわかり
 父ちゃんは酒飲んでますと又書かれ
 子の喧嘩ボチが味方でけりがつき
 ぼく肥満児よとテレビを離れない
 鬼ごっこ松葉杖の子も混り
 子に覗きこまれるとこに母が居る
 満四つが教育ママを知ってます
 クレパスの折れた瞳に母がいる
 泣いた子のピカソするする出来上がり
 子に書ける字があり障子も唐紙も
 遊んでた子が当て逃げの目撃者
 かすがいになれずちちはは引き裂かれ
 風の子の群れに見つけたうちの孫
 雛祭の子には届かぬ手の高さ
 子供部屋反省したという灯り
 鍵っ子に秋の夜空を染めて落ち

木石 静子 可也子 代仕男 里風 一笑 千梢 一三夫 徹也 いさ夢 日満 岬月 吉春 万竿 千翁 孕彦 静歩 同 通児 瑞枝 一栄 葵水 克枝 豊平次

ランドセル幼い夢の詰め切れず
先生とママの話が食い違い
お年玉手刀切って子が貰い
天と地を躍って跳ねてランドセル
園児にもボスありブランコ占有し
赤ん坊まるまるおしめかえさせる
ランドセル入院の子の枕元
げんまんをして夕焼けの子が別れ
片言の坊や母ちゃん死んじまえ
子のブラン夜の二時に起こされる
子宝がまた別室へ追いやられ
二歳児がゴーゴー踊るのも時代
都会の子あれもこれもと押花に
子の寝言絵本の鬼に追われてる
絵日記の掃除したこと派手に書き
夏の子に夕陽しぶしぶ沈みけり
園児にも英雄いました泣きません
二歳児のもうハンドバッグ持たされる
三歳を家中過保護のまま育て
満四つゴマ摺ることをもう覚え
センセン(先生)と寝んねをすると枕さげ
カギっ子を残し広場は夕焼ける
はえは立て立てば襖を破りだし
乳母車目より高く兄が押し
三歳児末怖ろしき知恵をみせ
末っ子の作文ママがはみ出そう
子が建てた小猫の墓にちちる鳴く

弘美 利美 秋月 甲吉 痴亭 古方 めぐみ 不水 忠三 スミ子 和久 久津 志津 珠笑 スミ子 新之助 八郎 欣一 春昇 清子 一三夫 弘道 史好 為二 英二 智子 露杖

子の自慢画紙をはみ出す母の顔
園児今日ストのパパに迎えられ
三歳の抵抗はかなく泣き寝入り
子の知恵はだんだん数に欲がつき
おしっこが云えずおませな口をきき
分校を閉じてお山に雪が来る
坊ちゃんの汽車行儀よく通り抜け

里風 一二三 洛醉 誓二 静香 晃男 春巳

★

チビツ子川柳家

路郎、葎乃先生の令嬢梨里さんも小学生のころは句会遊びをされたそうである。机をな

一分間の柳論

今年の三月から略号の慶弔電報が廃止された。「ヨニヒ」で御結婚を祝し末長く幸多かれと祈る、以下同文でお名前だけをなぞという風景がなくなるのは有難い気がする。字数も多くなったことだし、個性のある電文が出てきてもいいときである。南極昭和基地の越冬隊について、こんな話を聞いた。お正月を祝うたくさんの電報のなかに、若い隊員に宛た奥さんからのたった3字が、オーロラのように皆んなの心を彩

らべ題と選者名を紙に書き、梨里さんの主幹気取りが目に見えるようだ。
毎月送本日には車ごと飛んできてもらっている天笑さんの令息たちも川柳にはパパ譲りである。
二十年ほど前には、次女の茂子や松江にいる三女の溥子も、たしか五年生と三年生だったが、句会へ出席して生々庵先生の選で、せのびしても父は母よりまだ低い溥子父はども勉強すればすぐ級長茂子と活字になったが、ぼくが川柳には不熱心なので止めてしまった。ときどき句を送ってくるが、どうやらモノにならないようである。

(不二田一三夫)

正本水客

った「アナタ」と。
私はこんな川柳が創りたい。

舞台風というのがある。幕があくと温度の差で舞台から客席へ向って吹く風のことである。先代鷹治郎や全盛時の水谷八重子が舞台に現われると、その華やかさに、その美しさに溜め息のさざ波が客席を吹き渡ったものである。感動の舞台風だという。私はそんな川柳が創りたい。



三歳児が描いたウルトラマン

仮面ライダーと川柳

河内天笑

今春幼稚園にはいった長男、ひとつ年下の次男、もうひとつ下の三男、このチビツ子トリオがそろそろとオヤジたるべく、ちょいちょいやりこめられる。

このごろは語呂のよい言葉に興味を持つようになり、川柳での言葉の流れやリズムに敏感になったようである。

最近「川柳かるた」なるものを作ってやった。それまでも三つ四つの句は僕からの聞き憶えて知っていたのでスムーズになじんで来た。「川柳かるた」には出来るだけ子供達に親しみのある身近かな言葉やリズムの良いのを選んで、いろは順に約八十句ほど全部ひら仮名で書いた。

最初二三日は耳がタコになるほどかるたを読んでもやめた。そして読ませた。またまった文章を読むのは彼等にとって生まれてはじめての事である。ひら仮名を一字ずつ追いながら読んでいくうち、身近かな言葉や、子供なりの感覚で理解出来るところへ来るとすらすらと読める。「これはイケル」と思った。

先ず一発で憶えた句。

パパ会社坊や学校ママ昼寝
お月さん残念ながら負けました
草の芽が出たぞオシッコさせながら
どろぼうの逃げた窓から首を出し
すずめの子そこのけくお馬が通る

兎男
豆秋
薫風
小松園
一茶

川柳ゲームは先ず上五を僕が読みその句を取らせるようにしたが、長男と次男ではかなり差があるため、かるた取りはすぐ止めた。そして口でその句を上から下まで云わせるようにしたら四分六ぐらいで次男もついでこれる事が判った。

この方法にしてから句を憶えるのがとても早くなった。つまり目よりも耳からの言葉の流れの方が彼等には受けたようだ。

ふみきりはジンガジンガと夕焼ける
挨拶はおうむに似たり春の街
混浴のおお一本たよりにし
らりるれるはつきりしない程に酔い
いのちまで賭けた女でこれかいな
「いのちまで……これええ句やな」と云わ

水客
白柳
一栄
豆秋
梅里

れた時はドキッとしたり。一発で憶えた句はみな言葉の流れが自然で感覚的にもストレートである。こうして正月前から正月にかけての十日ほどで約五、六十句を憶えた。句には全部作者の雅号も添えて読むので雅号も川柳の一部として憶えているが奇妙な現象もある。

それは
君見給えはうれん草がのびているーくんぶう

と間違えたりする、感覚が似ているので間違うのかも知れない。また

電話口花千代さんは舌を出し
発車ベル女房だけは手をふらず
の句の上五を入れ替えて間違えたりする。

「発車ベル花千代さんは舌を出し」(次男)
などと上手に間違えられるとこっちは腹をか

かえて笑い出す仕度である。
句と作者を間違えたり下五をド忘れしたり
すと頭をひっぱたく事になっているが、いち

ど間違えたりド忘れしたものはその次にも同じところで立ち往生する。そのたんびに頭をひとつ張られたのはかなわんと見えて、最近ではこんな時勝手にアドリブしてごまかされる事がある。

びいびいといと蛙を大中小に分け

トウシュウ

男みな阿呆に見えてのりおくれ
びいびいといと蛙はそんなふうにとぶだろ

うし、「売れ残り」を僕が「嫁きおくれ」と
間違えて読んだ時など即座に「乗りおくれ」と

と変身させられたのには参った。
この正月高野山に行った帰りの車中、一日

を思い出しながら子供と作った句に、
高野山ぬるいうどんを食べさせられ
の日記的な句を作ったがこれは自分が作った
ものだと思ひこんで、

こうやさんぬるいうどんをたべさせられ
よしながと、ちゃんと自分の名も添えて手
帳に書いてあるのにはあきれた。息子三人に
は一冊ずつ落書用の手帳を与えてあるが、そ
れには路郎先生や豆秋先生と仮面ライダーの

マンガがすんなり同居している。
★ 「灯台の夕陽 神話を抱きよせる」

尼緑之助句碑建立について

建立地 島根県大社町日御碕
建立時期 昭和四十八年五月
協賛資金 一口 五百円(幾口でも可)
送金先 〒693 出雲市若葉町 野村岬月方

いずも川柳会(振替口座松江八九
四四。一応六月末日までにまとも
たいと思います。
路郎先生の「川柳雑誌」創刊の翌年、十八
歳の若さで「川柳たかせ会」を創立、柳歴五
十年になんなんとする氏は、清廉と温和で鳴
る地方柳壇の雄であります。
よろしくご協賛賜わりたく謹んでお願い申
しあげます。(尼緑之助句碑建立委員会)

近 詠

須坂市 高峰 柳 児

よく眠りよく食べかたくない余生

最合傘不足は雨が止みかかり

緊張の度合いを自動ドアで高め

金の要ることで出しゃばり引きさがり

ラッシュないことで甘んじている左遷

大洲市 米 沢 暁 明

一枚がもう千円でない時勢

磨滅したまま石仏は拜まれる

穴ほれるまで杭もって立つ愚か

今治市 月 原 宵 明

花びらを踏んで反戦デモの列

陽炎に包まれて恋あそこここ

早春にアーケード街桜咲く

屈伸に六十鳴るとこばかりなり
お水取りまでと病人励まされ

上田市 金子 吞 風

出稼の便り妻もう縫い始め

三才児眠って保母も欠伸する

たな卸いっただか足りなかった金

岐阜市 市川 鱗 魚

名桜 淡 墨

そう言えばそうか淡墨だなさくら

人様の家で洋間は足が冷え

税務署で泣いてジャスマンとがめられ

名コンビ馬の足にも前後

今治市 長 野 文 庫

きよろきよるとする捨て犬のあわてよう

遮断機をはさみいらした会釈

値上げせずいつも百万弗夜景

「北はま」におもう

菊沢小松園

ある時の人は神に近くある時の人は悪魔に近い、併し川柳家は人間であり、蓋し、最も人間臭いものであらねばならないと私はおもう。番傘川柳社の金泉萬葉氏が句集「北はま」を出された。まだ一通り目を通した程度で紹介などは鳥濱がましいが、句もまた人間同様に第一感に先ず間違いはない。肩の凝らない、川柳の本道を示す句が勿体ない程並んでいる。誰もが感じ、誰もが見過ごし、誰もが句に纏め得なかつた事を適確に、立派に句にされ、川柳のよさを示されている、多士濟々にして人物にこと欠かぬ番傘川柳社の中におもつても正に人あり、萬葉氏であり白眉だとおもつ。近頃の難かしい氣疲れのする句の多い中において、氣楽に川柳に没入出来る思わず時間の経過を忘れさすほどの句集はそうさらにはあるまい。句の勉強に、句の研究に、柳歴の如何に関係なく手許に置いて参考になる近來の好著である。昔から句は人なりと謂われて居るが誠にこの句集は萬葉さんの顔であり、手であり、ころである。ある時は荒い息吹きを感じる時は静かな鼓動さえ

窺える。その人は庶民の中の雄であり、非凡さの凡人とも言えよう。人格の滲み出るこの句集には、暗さはない、概ね明るく朗らかな句が多い。近頃の毛細血管を掻き分け、末梢神経的な句で食傷気味な昨今、この句集を手にすることに依つて、ほっとした憩いを感じるの私だけだろうか。古い時代から知っている萬葉氏いつ何処でお会いしても変らぬ笑顔で迎えて下さる萬葉氏、私とは川柳では歩んで来た道も違い、柳社も違うが私の知っている限りの萬葉さんの句集には大きな提灯を掲げて一緒に、萬人を楽しめたいと切におも

う。

此処に珠玉の一端を示して見よう。

株持っているのでアサヒビールのむ

北浜の昼に用ある夜の蝶

結局はまた北浜へ舞いもどり

北浜の柳へ欲を忘れたし

北浜人ある日画廊に氣を静め

大阪に生れ大阪に育つた萬葉さんは北浜人であり、生き馬の目を抜くと言われる北浜の株屋さんであるがその純情さは斯くの通り、澄んだ眼で物を見ていられる。北浜の芸術家であり、北浜の詩人である。

遠縁のいつしか賀状だけとなり

難すめば五月に賭ける人形屋

甘党は損な今年もさくら咲く

人間の正味を見せる海水着

犬何も知らずに空を向く火花

枝豆とビールよばれて月が出ず

十二月帯へ挟んだのが不覚

今日の柳界で説明なしで抛り出してこれが川柳だと胸を張って言い切れる句集がどれだけあるか、自信を以て安心して推せる句集、それがこの「北はま句集」だ。巧まざるユーモア、ペーソスの利いた句、軽いが模倣を許さぬ句風、手の届きそうなどころにある星の光りだ。

妻の留守どのひきだしも妻句う

初恋を妻に話してたたかれる

そげ抜いてやる老婆の手も久し

手を合わず心で妻をオイと呼ぶ

女房のように氣のつくひとと旅

スチワードに聞けばこの位は揺れる

足数を数えるようにプラカード

靴磨き磨き甲斐ある靴に遭い

紅うすく私も女ですと巫女

看板屋いま接吻を描くところ

万引の目に万引の多いこと

潜水夫浮べば雲の動く空

いい寝顔今なら盗めそうなくち

ユーモアの教科書です。いいユーモア

川柳の勉強になります。(北川春巢氏談)

笑いの創造

秋田 實著
¥ 680円

兎に角、番傘川柳一筋に、右顧左眈せず、風雪に堪えて来た句には一本しっかりした筋金に通っている。古武士然たるその風手と俱に健康と句福を祈って熄まぬ次第である。

きのう・きょう

本多柳志

◇先日NHKの新作落語の時間で、桂歌丸の「時間売ります」というのを聞いた。新作としてはちょっと気のきいた話でユーモアもあれば、風刺もあって面白かった。時間という目に見えないつかまえ所のないものを、商品化することに成功して、瓶詰めにしてはじがっている人達に売って歩く筋である。はじめのうちは物珍らしく重宝だと繁昌したが、其の内に大量生産に成功した外国の企業が、十円入れると十分間の時間が出て来る自動販売

機までもって、日本に進出して来たので結局この「時間販売会社」も、立ち直る時間がないで倒産するというのだが、考えて見ると何共不思議で不可解なのは、この「時間」というしろものであろう。時間というものは凡ての人間に公平に与えられることも出来ない、貯めて置くことも先取りすることも出来ない。上手に使えばとても役に立つが、無駄に使えば凡そくだらんものである。昔の人は「時は金なり」と云ったがまことに其の通りであろう。一日二千四百円の社員も、二万四千円の社長も持っている時間はおなじでも、一時間の値打ちが違うのも、考えて見ればおかしい。

会社や製鉄会社の会計を通して、貯金が公債か税金の形で日銀の金庫へ戻っている。又使えるものである。併し私共は金の外にかけがえのない大事なものを、消し去っていることに気がつく。鉄道を作るために消えてしまった人間のいのち、云い変えれば人間の持つエネルギーである。それと五年間つまり四万三千八百時間に働く人数を掛けたところの気の遠くなるようなばう大な時間とである。どうやっても取り戻すことの出来ない大事なものを、我々の子孫のために失われてしまっていることに今更のように驚かされるのである。私達のもっているこの大切な持ち時間もあといくらないのだが、何とか仕事に家庭に又川柳にと能率良く使いこなして、何かを子孫や後輩の為に役に立てたいものである。

島崎藤村先生の「木曾路はすべて山の中である」の

木曾路を訪ねて一泊吟行句会と

東野大八先生の柳話の会

日時 昭和四十七年六月十七日(土) 十八日(日)
集合場所 十七日午前八時半、ナンバ大阪府立体育館前(バスツアー)

目的地 馬籠(藤村記念堂) 妻籠宿、寝覚の麻
宿泊地 恵那峡グランドホテル
会費 約六千五百円(中食二食共)

「初恋」	本多柳志選
「別れ」	橘高薫風選
「櫛」	大坂形水選
「夜明け」	菊沢小松園選
「観光雑吟」	若本多久志選
	西尾 栗選

(各題三句)

★定員制につきスグお申し込みください。
★お家族連れ歓迎。十八日午後六時帰阪。

川柳塔社

変 人

河原みのる 選

変人を動かすことも課長知り カズエ
 人寄れば一二は居ます変なのが 貞 祐
 変人を売り物にして客が来る 春日
 変人は損得抜きで論じ立て 松花
 変人だから預けとく蔵の鍵 どんたく
 真正直に生ければ変人だと云われ 素身郎
 変り者と言われ末座にみかんむく 秋女
 ご近所は変人と云うベレー帽 智司
 変人に似合わぬ粋な隠し芸 敬一
 歳とって来て変人に箔がつき いわを
 変人の父の世話して嫁き遅れ 伶人
 変人の胸が輝く文化の日 新之助
 変人と紹介状はほのめかし 木魚
 変人と云うても雨降り傘はさし 古心
 変人の案内広い趣味を持ち 恵子
 母の死へ変人やはりある涙 静泉
 変人の達筆で来た断り状 信二
 変人の奥さん倅そような顔 旭童
 変つてゐるなあと履歴書読み直し 一步
 変人の孤独は犬がなぐさめる 重人
 変人と決めて老妻驚かず バット

聖物で通り変人で又とおり 秀峰
 三奇人に数えられてるとも知らず 初甫
 変人にされて気楽になった旅 可住
 変人の父が崇った嫁きおくれ 扇水
 話したら変人案内あたたかし 南奉
 変人の候文で押す気概 眺童
 気に入れば変人とことん世話を焼き 利美
 変人とうま合う俺も変人か 肖二
 変人もやっぱり美人の酔で酔い 鎮也
 変人も若い時には恋もしぬ 綾女
 あの変人がこの頃ボウリング 敏
 俄雨変人だけが走らない 代仕男
 変人は変人なりに世を見詰め 軒太楼
 妻だけは知る変人のあたたか味 酉合
 住職と妙に変人うまが合い 宵明
 佳
 変人から見れば人間みな変人 千代香
 変人は季節はずれの花に似て 貞男
 変人に一目おかれてゐる変人 葵水
 変人も風呂では同じ首並べ 陽山
 変人といわれ変人やめられず 古方
 人
 変人も孫だく笑顔ただの人 潮音
 地
 変人の看板あげれば占めたもの ろ亭
 天
 変人が酔えばまともな事も云う 本陸棒
 軸

変人の何おもいけん髭を剃り

ラーメン

西岡洛醉選

残業へラーメン届くビルの窓 いわを
 青春の歌ラーメンの箸を振り 梁水
 ラーメンの日も耐え抜いて共稼ぎ 白汀
 チャルメラの音へ夫婦で食べに出る 翠月
 暖冬にチャルメラしついで鳴り 新之助
 味噌をかき北国ラーメン雪の味 貞男
 企業ラーメンこんな味あんな味創る 古方
 ラーメンの温味へ黙秘崩れ掛け 洋々
 ラーメンで腹温めてデモの列 カズエ
 猫舌へラーメンはがゆい程熱い 魚山
 浪人に味噌ラーメンの日が続き 宵昭
 ラーメンが日本の味となる戦後 不詳

ラーメンでよし惨敗の日を埋める 里風
 丁度よい辻にラーメン屋台店 潔
 ラーメンの油に滲み出前箱 宵昭

川柳塔柳箋

一冊 七〇〇円 送料 七〇〇円

吟 題 課

ラーメンでお茶をにごしている咄嘘
夜学する子へラーメンに卵そえ
ラーメンの湯気へ二人の意気が合い
ラーメンに夜なべの冷えをいたわれ
チャルメラへ夜業する手の小休止
夫婦けんか ラーメンの湯気につかどけ
ラーメンの屋台は再起の 共稼ぎ
チャルメラが北風除けた露地で鳴り
真夜中のラーメン親と子の対話
出張へうまいラーメン教えられ
チャルメラが胸のすき間を通り抜け
ラーメンの湯気午前二時の街にする
ラーメンですませと妻のメモで留守
ラーメンの屋台に明日の夢を賭け
ラーメンの湯気が屋台の灯を囲む
ガリ勉の傍へラーメン湯気で来る
ラーメンの屋台がもどる吹きまじり

古心 不詳 千代香 どんたく 好一 貞男 笑風 三十四 止水 信二 三郎 与根一 弘朗 重人 千代香 本蔭樺 カズエ

ラーメンで温め合うて凡夫婦 千代香
ラーメンの味がもやしと歯に残り
軸

底

太田良子選

エリートは無口計れぬ腹の底 代仕男
もう終りですかと底を覗かれる 潔
海底の資源へのびる科学の手 章雅
底知れぬ悪事世相をさわがせる 初甫
掘り下げた底から妥協点が見え 千翁
底辺のくらしの中のデカイ夢 里風
菓子折りの底にも言うものを敷き 本蔭樺
売ったのが底値だったをまだ悔み 旭童
底冷えを妻の迎える 鍋料理 春日
喋るから底の浅さを見抜かれる 素身郎
出歩いて飲む口実も底をつき 浄々
底にまだ底があったと報らされる 凡九郎
陽を見ない底がみんなを支えてた 古方
どん底のくらしへ初心崩れかけ 豊生
どん底の暮しを月にのぞかれる 木魚
底辺に届く政治を待ち望み 松花
底力見せてタイトル防衛し 一郎
花名刺財布の底で大事がり 巴ツト

どたん場で見せる旧家の底力 思月
底のない財布にさせた物価高 悠泉
どん底の暮しが政治信じない 翁童
底見える海へ二日の休暇取り 信二
好きな柄たんすの底で派手になり 利美
過去すべて秘めて静かなダムの底 白汀
借りものの策で掛合い底をつき 露杖
底辺としてつんば棧敷に甘んじる 葵水
土根性どん底に来て顔を出し 秀峰
心底を見抜き秘密を打ちあける 綾女
民宿のもてなし底冷えを忘れさせ 肖二
底抜けにゴウゴウ踊る若い脚 和宏
うますぎる話の底にある野心 翠月
腹の底割って話せる友があり

上げ底は承知義理への土産買う 暁風
顔見世を出て底冷えの河原町 輝親
底の底まだあるような底にきて 古方
すき鍋の底に遠慮の肉があり 笑風
底の底見せて悔ない人といる 西合

謎秘める天平仏の底光り 貞祐
米櫃の底が今夜の導火線 敬一
絶好のチャンスに財布が底をつき 弘朗
奥底が見抜けなかった自殺なり 軸

初歩教室

— 題「移」 —

本田恵二朗

一輪を生かす移植に鉢が有り

(一輪を生かす移植の鉢選ぶ)

移転する日は大安と決めておき

これでは川柳にならない。川柳味を如何にして加味するかいと苦心をせねばならぬ。

(大安の移転へにくや降り続く)

尚、句の漢字にわざわざ振仮名を付けて、

読みにくいものにしてはならない。漢字の読

めぬ川柳人など一人もいないし、句を鑑賞す

る者にとっては邪魔もの以外の何ものでもない、悪い癖は捨てなくてはならぬ。

或る柳人は、日本の短文芸である川柳を横

書にして送句して来る。横書きの川柳は私の

鑑賞意欲を殺してしまう。なぜ立書にしない

のかその気持ちが変わらない。これなどは最

悪の癖と言ふべきである。

古稀に来てむら気移り気尚失せず 貞 祐

(古稀というに失せぬ移り気とは不思議)

移る日差し入院患者日向ぼこ

(移る陽を追うて患者日向ぼこ)

潔

正親

同

移転先知らさず君の幸願う

(移転先知らさず秘めた片思い)

渡り鳥移り住んでること信じ

(無事移り住んだであろうよ渡り鳥)

小春日和の庭を楽しむ移植コテ

(移植コテ土と対話をしてあきず)

移転してまず方言を勉強し

(移転地の方言をおぼえるのも楽し)

倒産の社長夜中に移動する

(真夜中の移転倒産したらしい)

駒切れで人事移動も打つ手なし

(駒切れか人事移動の色気えず)

人事移動終った春のいぶき吸う

(人事移動わが世の春にしてくれる)

移り気な蝶々へ花妍競う

(移り気な蝶々へバラが笑む百合が笑む)

移り気は責めずたたえるため涙

(移り気へなんにも言わず溜め涙)

移り気になせぬ仮面をつけかえる

(移り気を封じる仮面をかえてみる)

移り香も花ゆえにこそ好ましく

(花なればこそ移り香のゆかしけれ)

左遷だとわかる移転も宮仕え

(官舎から官舎へ移る宮仕え)

名匠は移る世に目もくられず

(世の移りどうあれ名匠の技汚れる)

移り香もみなほり込んで洗い上げ

(洗濯機に惜しや移り香吸い取られ)

移り気な客は売子をてこずらせ

(移り気な客へ笑くばで決めさせる)

住宅に移り一城築いた気

同

豊 生

誓 二

同

豊 生

誓 二

つとむ

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

(新築に移って城主になった顔)

郊外に移ろう子供にせがまれる

(郊外へ移る移ると子らの声)

汽笛鳴る移民門出のテープ切り

(移民船のドラが泣け泣け泣けと鳴る)

移転先告げず迷惑かけたとき

(移転先告げず迷惑かけたとき)

移転先さがしただけの督促状

(移転先さがしただけの督促状)

移り気の背中はずでに構えたり

(移り気な男と背に書いてあり)

移動するカメラがとらえたニキピ面

(ニキピ一つ移動カメラに見つけられ)

ジェット機の轟音に枝を移す小鳥

(ジェット音へ小鳥一と枝移っただけ)

時移り声なき庭の沈丁花

(時の移りどうあれ薫る沈丁花)

移民艦テープと走るお見送り

(移民艦テープを切るまいとして走り)

移し植えし椿今年はつぼみ持ち

(移植した椿がつぼみ見せてくれ)

孫の風邪家族に移り総倒れ

(孫の風邪が隠居部屋へ移転した)

移転する度に荷物が増えたり

(移転する度に荷物が増えたり)

移転先クイズと去って行き

(移転先クイズと去って行き)

世の中の移り変りのはげしさよ

(世の中の移り変りのはげしさよ)

移転先夫婦の名前も書いてあり

(移転先夫婦の名前も書いてあり)

進

秀 村

進

三十四

藤 持

静 子

重 人

凡九郎

敏

静 堂

維久子

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

移り気な友しらしらとして戻り
病院のスリッパ水虫移りそう
土地ブームご先祖さまを移動させ
移り飛ぶ神経痛にささいなまれ
お向いの欠伸が移る終電車

露杖
利美
同生
慶彦

白浜よいとこ

菓の花川柳吟遊

香川 酔々

天王寺駅午前九時「菜の花」の旗のもと、
顔・顔・顔。例によって小松園先生が、しん
がりを務められる。畑尚山さんのお世話で、
急行を道成寺駅に臨時停車して貰う。まさに
どこかの国の大臣なみである。急行の停らぬ
駅の切符買う(葵水)が停る駅となり、幹事
は、また渡す切符大事にあたためる(久司)
ということになる。旅はまた楽し。指定席美
人の横でのぼせてる(千万里)となる方あ
り。定刻道成寺駅着。道成寺の石段が近い。
石段は記念写真を撮るところ(菜)であり、
六二の石段を登りはじめ。石段の上から仁
王覗んでる(牧人)信仰でない石段を登り切
り(葵水)石段を登れば別の風が吹き(柳志
)出す。車中の酔いが大分効いて来る。大蛇
ほど飲んで狸々のような顔(ふみよ)中に

お座敷を日溜りに移すおままごと
移転した安堵へ公害追いかける
おもちや箱の中に見つけた移植鏡
移すまじ京には京の味がおすすめ
欠伸だけ移し合うてる倦怠期

シゲ
軒太楼
カズエ
まさひろ
比呂路

は、この女已歳生れかよくからみ(鬼遊)。
道成寺は、新西国三十三か所の札所。泣き
寝入り蛇にもならず観世音(小松園)に手を
合わせず殊勝さ。蛇の執念女はこわし妻こわ
し(茂雄)と、この際サーブにこれつとめ
るのは誰ぞ? 蛇のような女に会いたい五十
過ぎ(菜)とはかない抵抗。方丈の説話きわ
めて漫談調。お経より大蛇で稼ぐ道成寺(柳
志)と相成るわけ。随筆に鐘のひびきも書き
添える(悦郎)つもりが、残念ながら、清姫
のように炎えて見たい鐘(維久子)がない。
帰途菓子さん・美代さん行方不明。娘の帰宅
早くも遅くも親案じ(まさお)はじめる。や
っと田辺駅で、母ちゃんの家出親類巡りをし
て戻り(雀踊子)でめでたくチョン。いよいよ
よ白浜温泉舞。早速人生の余白いで湯に身を
沈め(弥栄子)る人。温泉でやつと二人とい
う気分(弥生)とまではないかないが、湯の町
で男の野心暖める(河産)男であり、温泉の
乳首へ波紋たわむれる(鬼遊)女ということ
になる。女房と温泉宿の能の無さ(大茂津)
など無縁の方ばかり。
切符買うて急に淋しくなる左遷(薫風)と
は、大ちがい。実に楽しい一泊旅行。そこで
旅楽し温泉に酔い酒に酔い(天笑)だしてく

全力投球、恵二朗総攻撃、全員突撃、そん
な構え方での投句を期待するや切ない。
題一五月二十日締切(七月号発表)
宛先 岡山県倉敷市下津井三二七一一
本田恵二朗

ると温泉街へ自分を捨てに来た女(雀踊子)
温泉へ蒸発らしい紳士風(牧人)のカップル
がでさがる。どてら着て、元湯の湯気を見
に廻り(小松園)、温泉は春のささめき灯が
ともし(牧人)温泉の町へ、一夜の恋残し(十
郎)温泉街浮気をした顔ばかり(河産)
と好奇心の権化。またたきの合図へ巡りの悪
い奴(百酒)そのうち、温泉に体のリズム狂
わされ(葵水)る人も出る始末。療養に来て
温泉呆けてかえり(花梢)温泉で人間らし
い朝が明け(河産)はじめる。
網不知こんな港が白浜に(菜)と詠われた
名所巡り。つば焼きの匂いもさせて客を呼ぶ
竹荪 声にひかれる。命綱つけて一家の柱
です(凡九郎)と自負するひと、貝殻節唄
う女の眼に涙(酔々)に酔い、とも綱をとけ
ば波浮の港に似た思い(菜)とロマンに身を
沈める。それでもなお、つば焼きを一個残して
まだ飲む気(メ女)と豪のもの。海の幸わさ
びに味が貝握る(岳人)と食通。ぼつぼつお
召列車が大阪へ帰りを待つ時間。吟遊も終わ
りに近い。お別れのしるしにくれた桜貝(天
笑)を持って、天王寺駅着午後六時。
めぐり逢うとこでドラマは、コマーションル
(美代)でザ・エンド。

大萬川柳

「感謝」

入選発表

選者 川村好郎
投句総数 六百九十六句
入選 七十四句

大阪 葉子 耐えて来た母に感謝のパスポート
東大阪 喜風 十代に感謝を説いてとぼけられ
大阪 小松園 感謝するこころ明日の陽を信じ
堺 素郎 感謝してますがなと妻ふてくされ
羽曳野 吐来 愛の鞭だったとわかる親となり
堺 真沙子 あり余る米が感謝を忘れさせ
藤井寺 吸江 感謝状のわりに少ない金一封
松原 史好 感謝より一言好きと云うてはし
堺 一二三 悲しみと感謝で保険金を受け
大阪 好一 感謝する気にもれない恩をさせ
香川 酔夢 よみがえる感謝で越えた倦怠期

東大阪 弥生 逢えば気儘離れば感謝の人の居て
羽曳野 可動 感謝して小さな運をあたためる
宝塚 ゆきを 叱られてすねた日もあり謝恩会
堺 青香 紙吹雪中に幸運感謝する
富田林 花梢 退院の日に日にうとくなる感謝
大阪 克美 新婚の便り感謝してますされてます
岡山 川端柳子 かげで手を合わせ病臥に出る気儘
岡山 止水 丸出しにした方言で感謝され
新宮 久司 見えすいたお世辞へ感謝するも嘘
高根 芳子 感謝から始まる朝をもめる悔
鳥根 正朗 感謝して暮らす子供の伸び盛り

倉敷 梁水 感謝する日々老境へ鞭をうち
今治 昌道 感謝とは別な勝気の口が過ぎ
今治 有里 感謝から芽生えた恋を披露され
大洲 暁明 感謝して次の無心をほめめかす
鳥取 静泉 有難い過疎の農継ぐ嫁がくる
大阪の保 声の出ぬ感謝一ぱい目にあふれ
富田林 弥栄子 美しい別れへ女として感謝
大阪 比呂路 度の過ぎた感謝汚職に誘いこみ
倉敷 翁童 心では感謝妻をこき使い
松江 通児 逆境に感謝今日ある廻り椅子
豊橋 翠月 感謝するどころか返事もまだくれず
富田林 維久子 感謝する心やすらぎかもし出す
岡山 千代香 夕の鐘聞きつつ天と地へ感謝
倉敷 克枝 感謝していると手紙になら書ける
大阪 敏 心から感謝するほどわりきれず
大阪 新之助 感謝の意表わす金がまだ出来ず
岡山 山元柳子 殉職の警部へ悲し感謝状
松原 重人 定位置で今日も感謝の箸を取り
八尾 悦郎 感謝され心の氷解けはじめ
倉敷 里風 感謝状見て貰いたい額の位置
岡山 白水 生前はくさし死なれてから感謝
鳥取 洋々 口下手の感謝は強く手を握り
貝塚 つき子 感謝しながら夫へ又も出る不足
ついてきた運へ感謝を忘れかけ
尼崎 利美 心では感謝してます怪かじり
感謝状額ぶちまではくればはらず
門真 鉄児 感謝した気持が通う手の温み
口ほどに感謝しているとも見えず
倉敷 八笑人 感謝する姿勢でわらび天に伸び
よみがえる感謝鳥居を抜けてから
呉 英詩 感謝しているがと世話をうるさがり
倉敷 扇水 感謝感激された貸金戻らない
ご先祖に感謝している土地ブーム
あの時は感謝していた空手形



古方手書き句集

路郎門下の逸足として鳴るユニークな作風！
戸田古方の第二句集成る！

発行所 大阪市南区鰻谷仲之町二〇

川柳塔社

百部限定版
頒価・八百円
(送料本社負担)

美しい水彩画入り

- | | | | | |
|---|--|---|--|---|
| <p>感謝していますと一線ひく女
大阪克美</p> <p>催促のしにくい程に感謝され
倉敷筒子</p> <p>本人が感謝しているそれでよし
富田林 弥栄子</p> <p>歳月が感謝の二字を風化させ
大阪水客</p> <p>割箸は感謝している音でなし
人ノ句</p> <p>万策の尽きたる謝恩セールのなり
松原史好</p> <p>感謝され引受けた荷が重過ぎる
倉敷筒子</p> | <p>感謝さえ口下手誤解されている
米子 瑞枝</p> <p>感謝もう忘れた情性を指摘され
富田林 美代</p> <p>抵抗があつて感謝にふみ切れず
富田林 美代</p> <p>オーバーな感謝に野心の彩をみる
富田林 美代</p> <p>泣き度いほどの感謝の筆が運はない
富田林 美代</p> | <p>心から感謝してると判る文
米子 瑞枝</p> <p>感謝することを知らないふしあわせ
米子 瑞枝</p> <p>しごかれた憎しみ感謝に変わる夜
大阪庸佑</p> <p>手を合わす気持を秘して妻と坐す
大阪庸佑</p> | <p>天ノ句
素郎</p> <p>植えるとき刈るとき天地ありがたし
選者吟</p> <p>喜びですまぬ感謝の内祝
昭和四十七年度</p> <p>ベストテン
(四月現在)</p> <p>一〇 倉敷
一〇 藤井寺
八〇 藤井寺
七五 吳
七五 吳
六五 東大阪
六五 富田林
六五 富田林
六〇 大阪
六〇 大阪
六〇 倉敷
六〇 米子</p> | <p>一〇 醉夢
一一 比呂路
一二 素郎
一三 真砂
一四 白水
一五 克枝
一六 通児
一七 筒子</p> <p>昭和四十七年度 第六回
「つつ抜け」 五句以内
縮切 五月二十日
縮切 五月二十日
縮切 六月二十日</p> <p>投句先
大阪市南区鰻谷仲之町二〇
川柳塔社内 大萬川柳係</p> |
|---|--|---|--|---|

柳 界 展 望

あちからこちから
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

▼中島生々庵、小石ご夫妻は五月十二日に令息のおられるアメリカへ出発。同月二十七日に帰日の予定で、ロスからの帰途ホノルルへ二十三日ごろ訪問、同市でハワイ柳人と会い、ここで歓迎句会にのぞまれることになっている。

▼大坂形水氏(大阪同人)も五月中旬に欧米旅行に発たれる。

▼浜田久米雄氏(岡山県同人)も目下渡米の準備に忙殺されている。

▼山上千太郎氏(小松市同人)の句碑建立除幕式が四月十六日に同市熊野神社で行なわれる。なお川柳大会は追って発表。

▼第二十三回新潟県川柳大会は七月二日(日)午前十時から新潟市幸西三丁目の新潟会館で開催。雑詠(新作未発表句)各選者に二句(同一句を禁ず)、選者は

白石朝太郎・桂枝太郎・寺尾俊平・水瀬片貝・大野風柳の諸氏。席上第三回川柳三太郎賞作家●表彰やパネルディスカッションがある。授賞は五月二十日までに百回同封の上、新津局私書箱十五号柳都川柳社宛。のようにより決定。あかしや賞は白い指白くしならせ嘘創る。ほか四句、喜瀬信彦(札幌)ばぶら賞、反旗抱きしめて庶民の喪が続く。ほか四句、斎藤正人(滝川)幌都賞、騙されてくれたカツラが悲しうき。ほか四句、菅原光子(室蘭)。

▼昭和四十六年度宮城野賞受賞者は同人の部に若葉卓志氏(仙台市)、会員の部に渡辺銀雨氏(秋田県)が決定した。公草の動画上奇型魚が主役。卓志の「子の数に切る包丁は母のもの」銀雨。

▼昭和四十六年度こなゆき賞第一部雑詠、同人賞は大原敬氏(小樽市)が受賞。核実験悪魔も息を止めている。冬眠子賞は斎藤正人氏(滝川市)。「逆らわぬ妻が鎖を握りしめ」草笛賞は、細川不凍氏(当別町)。「墓碑銘の影に産まれる私の卵」新人賞は宮崎誠一氏(函館市)は朝陽に偽わりはない靴をはく。がそれぞれ受賞された。第二部題詠は木村つとむ氏、第三部句会は小山内恵子さんが受賞。

▼川柳ジャーナル三月号は通巻百号を迎え第一回春三賞の作品を特集。受賞作品「墮胎」時実新子さん(姫路市)、「秀作に岩村憲治、小西逸歩、村田治男、渡部可奈子、定金冬二」の諸氏。川柳ジャーナル別冊河野春三特集号は三月十日東京都豊島区北大塚一の一三三の四森林書房から発行になった。河野春三氏の柳歴五十年、特に戦後からの革新の道を歩んだ現代川柳の歴史そのもの。「少数者のみち」は一読すべきで、春三に寄せる好意ある多くの執筆者の文章も革新派にめざらしく温いものである。

▼川柳七草会創立二十周年記念川柳大会は四月九日岡山愛生園だるま堂で開催。岡村久志良氏(岡山同人)らが選を担当された。

▼第三回北国川柳大会は五月二十八日(日)午前十時から金沢山の北国講堂で開催。兼題、太陽・花嫁・外国・株主・日帰り・チャンピオン(伊藤茶仏選)・ポウリング・コンピュータ、各題二句、授賞は出席者のみ。

▼ますます臨時増刊号の「吉備団子」二十二集が二月十日発行になった。三百三十余人の自選句集、定価五百円、送料二十円、申込みは岡山市津島二五四一川柳岡山社へ。

▼第四十三回京浜川柳大会は四月二十九日(祭)正午から横浜開港記念会館で開催。

▼現代川柳類別高点句集・志水剣人編が四月下旬に完成する。全国誌約二千冊から題別高点句を三句選んで、一万二千五百余句を掲載、定価千三百円送料百拾円。申込みは横浜市南区井土ヶ谷中町一〇七川柳黒潮吟社宛。

▼かゞみ句会は四月四日鏡野町小田公民館で開催。五月句会は二日夜、池田古人居で、題、流れ・ハッスル・ふるさと、六月は二日、題、田植・訛・カメラ。

▼第八回愛知川柳作家協会川柳大会並に総会は五月二十八日(日)午前十時から名古屋市西区役所で開催。兼題は、十人十色・決心・面・舌・花言葉・植木・女心・子供の日、各題二句、授賞は百回同封の上、名古屋守山区小幡東嶋三〇〇七の二六三喜田健水宛。

▼岩崎愛二氏(京都府)は三月三十一日逝去された。氏は川柳雑誌時代、宴会会員として有名だった。謹悼員として有名だった。謹悼周年記念川柳大会は四月九日(日)午前十一時から美濃市公民館で開催。

▼こなゆきが二百八十号記念誌上川柳大会が開催され、七月号に発表になる。

▼川柳白百合の八十八号は第六回岡山県川柳大会特集号として四月三十日発行。

▼第二十三回エヒメ春の川柳大会は四月三十日(日)午前十時から松山市PTA会館で開催。

▼愛媛川柳研究大会は五月七日(日)午前十時から今

治市の海浜クラブで開催、兼題・鳥居・縁起・署名・覗く・むらさき・問合せ、各題三句、投句は二百円、主催汐風川柳社。

▼川柳道場(水粉千翁方)の百三十号は二十二人選者の選で兼題、「美」に挑戦、大賞は三宅成行氏(総社市)が獲得された。本社から、生々庵・栞・好郎・久米雄・恵二郎・薫風の六選者が担当した。「一人で戦うとき勇ましい」成行

▼愛媛年鑑(愛媛新聞社発行)七一年版は、「現代愛媛柳人集」「花からみた愛媛の四季」「選挙」の三編から成り、四十五年版の俳人集、四十六年版の歌人集と共に短詩型文芸の三部作として好評を博している。約四百人の自選句を収録。渡辺曉童氏からのお便り。

▼第一回京都塔の会句会が二月二十九日松川杜の居で開催された。三月句会は二十八日だった。「塔の会」創刊号で杜的氏は「瓢箪から駒が出る、そんな具合に大鉄川柳から塔の会がこぼれ出ました。」と書いておられる。発展を祈る。

▼菊沢小松園氏(大阪市同人)の鬼百句が、河内長野

の鬼の会の会報第十号に掲載され話題を呼んだ。

▼小川静観堂氏(伊丹同人)は八十四才の春を迎えられたのだが、令孫を迎えられたのが、令孫を連れておりに天王寺動物園へ行きへいっしょになって帰る、一ぱいひっかけて寝た由。

▼水谷竹荘氏(大阪同人)は全電通川柳連盟の全国大会に出席のため、三月十八日飯田温泉へ。飯坂川柳会津若松から東山温泉へ、東京では富士野鞍馬氏と国立劇場を見物された。

▼村上春巳氏(姫路同人)は常着のままハンドルを握り、ついでに一寸が何と出雲の日御崎まで走ってしまし、予科練時代の兵舎跡(米子空港)など思い出の地を見て、宿では主人が同じ航空隊の先輩であったり楽しい旅をされた。「磯の香に人情添えて日御崎」

▼小幡里風氏(倉敷同人)は三月十八日四カ月ぶりに退院が許され帰宅されたが「一瞬の怪我が一生」の謔を痛切に体験、「跛ひき乍らも歩ける日の倅」と寄信

▼岡崎祥月氏(松江同人)は三月二十一日から、四国

路、山陽路と城巡りの旅。高松城、姫路城、岡山城と見学された。「日本一の城日本に美を誇る」

▼木村涼人氏(青森同人)は尾上町の選挙管理委員会委員長に就任された。▼小笠原有里さん(今治市同人)は有里から有里(ゆり)と改号。

▼第十三回和歌山市文化協会主催の文芸まつりは三月十二日開催され、川柳の部で垂井美水氏(和歌山市同人)ら三選者選考の結果、一席に川上久司氏(新宮市)、「僕だけの足跡つける道

を選る」二席に内芝としよさん、三席に土谷城石氏、四席に野村太茂津氏(和歌山同人)、「人生の岐点で人間くさくなる」が入選、それぞれ表彰された。

▼大矢十郎氏(新宮同人)の長女富子さんと川上久司氏が四月五日華燭の典をおげられた。お二人とも近作柳樽で活躍中の川柳が結んだ縁で、菜の花句会の白濱吟行に出席の久司氏、十郎氏に参加者全員祝福の拍手を贈った。

▼出原敬一氏(岡山同人)はこの四月令息が警察学校へ入学、六月初旬には令嬢

が結婚と嬉しい多忙が続く由、お祝い申し上げます。▼増田次章氏(田無同人)の新住所は東京都田無市向台町一の七の六七。▼市岡曉舟氏、田中万里歩氏(ハワイ元同人)が四月十二日に日本へ出発される。一カ月の予定なので川柳塔社ではお会いできる日をお待ちしている。

▼岩本文晴氏(竹原市)の新住所は広島県竹原市竹原町中五五四。四月三日本社へ転住挨拶にいられた。▼浅川八郎氏(富田林市同人)から、あばらの骨折とうやら快方に向き伊豆へ来ています。伊豆の湯に心経痛を頼んどき。八郎。

▼渡辺乱坊氏(鳥取同人)は四月の本社句会へ出席。▼南海川柳会(五月例会)同期・控え目・仏頂面・会場(南海電鉄本社食堂内)。

▼菜の花句会(五月十五日)題・石・亀・誘う・花。会場(八尾天神さん)。

▼川柳東大阪(五月二十七日午後六時)題・鯉・転宅・上六・デト。会場(永和駅前、東大阪市市民会館)。

▼南大阪川柳会野外句会(五月二十一日午後一時)題(青春・野生・喜び・まわ

る)。▼城北公園、アベノ橋、天満橋、梅田阪急前からバスが出ています。雨天決行。▼四月十六日の島根県観桜川柳大会へ大阪から西尾栞・菊沢小松園・正本水客・島居百酒・河内天笑・野坂つき子・板尾岳人笑・諸氏出席、川柳島根と交歓。▼同日編集部の一三夫・新之助・葉子さんらは伊丹の小川静観堂氏訪問、八月号の特集の打ち合わせ後、六甲から百万ドル夜景を満喫さ

疲労回復・肩こり・神経痛に

アリナミン[®]A

☆25ミリ錠・ほかに5ミリ錠
☆食後すぐのむのが効果的です
☆くわしくは医師や薬局、薬店で



㊤

本社 四月 旬会

会場 以和貴莊

七日 午後六時

川村好郎氏久しぶりの柳話に会場は活気づく。一まず齒を痛めてから体調をくずし、一年余の医院通いから得た、もろもろの体験を川柳に結びつけていくあたり正に独壇上。

初心時代から、川柳は苦しんで作句するものとさとり、たとえば無痛分娩の子は心身ともに弱いが、母子がともに汗を流がしてきばり合って生まれた子は強い。川柳も苦作あつての佳作の誕生につながると力説。さすがに好郎氏の話術は会場を魅了しつくす。

鳥取同人の渡辺乱坊氏が初出席され会場の拍手を浴びる。また新人数氏の初出席など旬会部は明かるい。

月間賞は名手垂井葵水氏にかがやく。

(河井庸佑整理)

席題「幼稚園」 羽原静歩選

幼稚園祖母も一緒に行きたそう 重人
幼稚園の近所に出来たトルコ風呂 水京
母親はアクセサリーの入園日 芳川
お隣もそれではうちも幼稚園 庸佑
負けた方も同じほうびの幼稚園 生々庵

幼稚園泣く児泣かず児だまりつ児
幼稚園いけずした児も告げに来る
赤軍になる子と見えぬ幼稚園
ボーイフレンドへキャナル分ける幼稚園
怪獣の名前に強い幼稚園
幼稚園ママのない子は石を蹴り
幼稚園の迎えがおそい幼稚園
鍵っ子の子らしいなつきよう
迷い子を両手に連れた幼稚園
三日目はばあちゃんで行く幼稚園
ほのぼのと記憶の底の幼稚園
どじようコふなっコ園長さんの鼻眼鏡
通園のバスは雀を詰めたよう
横綱は泣き虫だった幼稚園
幼稚園親が返事をしてしま
卒園の謝辞が舌からこぼれそう
幼稚園おの字おの字へ春うらら
静歩

席題「クイズ」 福浦勝晴選

コンピュータカードの穴がクイズめき
クイズ狂バカにならない葉書代
小づかいはがきに化けるクイズ狂
クイズ捨てたる覚悟のクイズなり
クイズ解く鍵が死角に置いてある
正解のつもりクイズ皆はずれ
病んでからクイズで稼ぐ手をおぼえ
正解を籤で白紙にするクイズ
やつと解けたクイズ結局コマーシャル
クイズには子供の智慧が役に立ち
今日も又ポストへ急ぐクイズ狂
雑学に秀いでてクイズマニアなり

平凡な倅せクイズ解く夫婦
あたし今夜酔ってるのというクイズ
クイズ狂会社であくびして帰り
風船の山にクイズが迂り落ち
療養の長さへクイズ狂になり
解きかけのクイズが待合室にある
ざりざりの線でクイズのとけた顔
どちらにもとれるヒントが鍵の鍵
解けて見りゃこんなとこと言うクイズ
正解は賞品発送ポスト待ち
タイムショック火見樽のような椅子
テレビクイズに出るをふれ歩き
クイズかも知れぬ欠席した理由
アップダウン秒針だけが走る音
クイズ解く構えで壁面見つめられ
百万のクイズ茶の間で口惜しがり
クイズ狂根っから淋しがり屋です
クイズ狂の子が居てハガキすきに減り
ひと様の賞にやきもきするクイズ
ぼろぼろの辞引を出してクイズ狂
視聴者の方が齒がゆくなるクイズ
園児でもできるクイズのコマーシャル
人生のクイズ解けないまま疲れ
どんらんクイズで稼ぐクイズ狂

席題「道連れ」 西村芳川選

道連れのこんなによくも喋る人
道連れになつて内幕打ち明ける
道連れに漢方薬をすすめられ
道連れに急ぐ縁談頼み込み
道連れのそれから忘れられぬ女

東京都 池口呑歩

烙印を捺されて口も目も不満
変身をしたいある日の四面楚歌
人並みに目、鼻、口あり生きてます
噛みしめる唇なれど牙はなし

妻子とは別居発明を捨て切れず いさむ

兼題「幹部」 傍島静馬選

面接へ幹部にコネがある自信 滋雀
突き上げに幹部あぐらかいかいとれず 野太楼
何もかも幹部まかせの生欠伸 軒迷路
経営合理化幹部社員が多過ぎる 章雅
ひそひそと幹部秘密会議中 祥月
社で幹部帰れば上位ゆずる僕 岳人
ストの朝幹部連中切符きり トメ子
幹部からうすうすきいた社のピンチ 庸佑
将来の幹部とおだてこき使い 天笑
板ばさみの中で幹部の椅子にいる 花梢
押し効く幹部飲んだらだらしなし 維久子
幹部級スラリ喪の顔とは見えぬ 水客
幹部の目裏の裏まで見抜いてた 柳宏子
幹部だけどうに知ってた社の合併 水京
幹部みな一族で居る小企業 いさむ
一日中タバコを吸っている幹部 眉水
幹部だけ昇給停止と社は苦境 水酒
デスクから幹部が止らむ遅刻組 敏
幹部にはなれたが孤独つきまとい 一三夫
教団の幹部に教祖踊らされ 恭太

一分間の柳論

日比谷高校東大農林省刑務所

川柳革新を叫ぶ某柳誌の句である。これでは文字の羅列に過ぎず、川柳の破壊である。革新川柳の総てがそうであるとは云わぬが、総体的にあらゆる人が親しみを感じ、そして感銘を受ける句とは云い難い。

川柳革新とは伝統に即して、新時代にふさわしい詩心を求めるということではなければならぬ。なお美術、工芸などのように川柳に於ても裝飾性が必要であるが、それが過剰にならぬ。

福田丁路

と表現が崩れて、一人よがりの著にも棒にもかからぬものになる。

麻生路郎先生は著書新川柳講座で「川柳とは人間と自然の性情を素材として、その素材の組合せによる内容を、平言語で表現し、人の肺腑を衝く十七字音中心の人間陶冶の詩である」と述べられている。

川柳界を照らす灯台の灯として、永久に輝く金言である。灯台下暗しの譬えにならぬよう自戒したい。

幹部まだ戻って来ない食堂車 酔々
幹部まで届かず事件もみ消され 弥生
縄のれん幹部着に気焔あげ 綾女
幹部からにらまれていたとは知らず つき子
幹部まきアナ場へ走る三次会 一三夫
赤軍派幹部も惚れたの殺すのと 一三夫
会社知る幹部自社株離したい 形水
幹部には縁なく社内の生字引 いさむ
金出来て幹部の椅子がほしくなり 文秋
セールスを幹部募集とおだて上げ 信次
刑務所を出れば幹部のイスが待ち 柳志
幹部の顔覚えた頃に栄転し 水客
腕よりも金の力という幹部 好郎
幹部連帰ったあとで飲みなおし 静馬

兼題「誕生日」 水谷竹荘選

誕生日産湯の場面8ミリで一栄

誕生日馬令に過去を積み重ね 滋雀
誕生日おぼえてママに喜ばれ 野迷路
誕生日妻へ感謝のプレゼント 祥月
恋愛結婚めずらし誕生日は一つ 章雅
ホステスがおぼえてくれた誕生日 どんたく
誕生日会生れ月日に鱈を読み たくし
新婚の中は誕生日祝い合い 葛城
誕生日祖母は未だに数え歳 眉水
ふるさとの味がとどいた誕生日 重人
もつてくなくやと祖母は誕生日 信次
心配が出来た子供の誕生日 悦郎
子沢山まとめて祝う誕生日 吸江
子沢山誕生日など忘れ勝ち 三十四
紫の布団へ寛ぐ誕生日 肖遊
多事多難主婦誕生日を忘れかけ 鬼二
親の生れも知らず日はクリスマス 藤持
母さんの誕生日の出すメニユー 葉子

寮の灯の明るさの中の誕生日
社長さんのメモ工員の誕生日
迷うだけ迷うて贈る誕生日
天皇誕生日に生まれ猫背の老守衛
御馳走でやっとなつた誕生日
招かざる客が割りでこむ誕生日
誕生日覚えていたので恋になり
誰も気にとめてくれない誕生日
誕生日母ばっかりが忙がしい
赤飯の催促される誕生日
誕生日重ねてやっとなつた誕生日
一族で湧き立つ母の白寿の日
誕生日ケーキ忘れたパパ攻める
孫達の顔が揃うた誕生日
喜寿祝う連者な祖父の誕生日
誕生日とばけ合うてる倦怠期
天笑

赤飯と目刺しで済ます誕生日
誕生石四月生れへ高くつき
出稼ぎの子へ陰膳の誕生日
誕生日目満と数えてまた揉める
鯛よりもピフテキにできる誕生日
誕生日今日は我がまま聞いてやり
誕生日赤飯焦げたが気にしない
誰よりも嫁が知ってた誕生日
ふところの具合でブラス誕生日
誕生日来るとお迎え近うなり
誕生日忘れぬ母が有難し
誕生日に贈り贈られ恋進む
もう妻の誕生日など気にせず
家族喜みな母が暗記の誕生日
誕生日喜寿ともなれば箔がつき
誕生日今日は稼ぎに出る靴
柳志

雅号ぶつちやげばなし

しょうげつ



岡崎 祥月

お
か
ざ
き

今から考えるとカビがはえる程昔の
ことである。世は坊・月・風・時代に
てなげなくつけた雅号が祥月である。祥月命日
のこともあるのでお寺の大僧正にも伺いをた
ら別に悪くないとのことにて、今は川柳から遠ざ
かっている奈良井仙坊君や、故田中郎之介君等と
川柳雑誌社松江支部を結成し気を吐いたものでは
ある。仙坊君は柳人、冬生、と号をかえたが小生は
ずっと号を保持し戦争にも行かず細く長く下手は
下手ながら地元は勿論中央へも投句をつづけてい
る。小生の趣味は川柳一本なので明けても暮れて
も川柳、川柳。ひまさえあれば川柳を作っても
川柳には年齢もななくいつまでも若い気分である。
の気持ちになつて精進するつもりである。

人生の快楽川柳作ること 祥月(六十一歳)

子がくれた湯の香漂う誕生日
若返る父には邪魔な誕生日
誕生日の倅せ夫の胸を借り
子沢山今日はどの子の誕生日
兼題「ヒロイン」 戸田古方選

ヒロインのペール脱ぐ夜の終い風呂
ヒロインも本当に泣いた愁嘆場
ヒロインは作者の好きなプロフィル
ヒロインにもうつきまとう週刊誌
ヒロインの夫の役ですてに死に
ヒロインが貞操帯を不要とす
ヒロインや言うから美人と思うた
ヒロインは自画像らしいシルエット
ヒロインは匂い残してすれ違い
ヒロインの引き立て役で雇われる
ヒロインの空白画廊の隅に立ち
ヒロインの恋はすんなり結ばれず
ヒロインの代役別な味をみせ
壁に突き当りヒロインためらわず
ヒロインは私と自分で信じこみ
ヒロインとなつて唇乾ききり
チャンセルへヒロインごつちやになつちまい
現実のヒロインしやがれ声で泣き
ヒロインはもう善人の顔に飽き
ヒロインの出ないドラマに切り替える
ヒロインといっしょに泣けるひまを持ち
ヒロインのどこから見てもおんななり
ヒロインの後ろでほころび縫うている
その勇気女の性を意識せず

重人 喜風 悦郎 竹荘
弥生 誓二 柳志 庸佑 恭太 凡九 柳郎
水客 柳宏子 綾女 重人 天笑 いさむ
水客 柳宏子 綾女 重人 天笑 いさむ
水客 柳宏子 綾女 重人 天笑 いさむ



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

川柳たけはら

森井菁居報

懸命に走ったヒリに拍手湧き 千代美人形の末路も哀れ髪が抜け 春昇何ものまじえずひがん花業か 笑子海を見つめて二人の夢の色は青蘭幸むらさきの鶴むらさきの国を恋う 不朽順応の策なく私も貝に似て 美佐雄愚痴聞いてあげ人ごとでない老後 凡女一瞬に崩れる石と知らず積み 静水親父失格どこまでつづくぬかるみぞぐつすりと寝込で昨日の疲れが出 松緑釣り合いのとれた夫婦の美しさ 天石庵紅一点意識している眼が走る 康宏炎にも似て幻想にうかぶひと そのじ三十の抵抗赤いシャツを着て 西合栄枯盛衰夏が来て秋が来て 蒲居断崖にたたされ翼のほしくなり 五湖怒っては負けと鏡に訓えられ 大陸日帰りの気易さ旅を旅とせぜ 静雨悪いとこ全部父ちゃん似と言われ 静雨当番の夜道を月が追うてくれ こふみ

良きあなたなのに社会が受け入れず 年 末 という 人生 の 裏 表 誠 香 平和とは核持込まれたのも知らず 針に糸とおしてくれる嫁のいて 英 詩 足りきれた靴にくらしの詩が育ち サンプルの化粧で一日しやれてみる 扇 水 細々と暮し希望の火を消さず シュアレヒール銀杏並木の燃えに燃え 文 明 将来の希望父よりましな職 栄 転 は 故 郷 に 近 い 支 店 誌 泉 秋 ネジをかけたすぎたか生活かたくなり 日 出 夫 初孫の重みをこわれそうに抱き かつ子 軒下を明るく染めて過疎の里 南 風 進学の夢すて社会は厳しすぎ 春 子 茶の味を茶人に聞いている平和 峰 泉 枯らしてはいけない鉢をあざけられ 鬼 焼 適令期たずねてくださる人の居て 淨 美 太陽のような婦長に見守られ 輝 子 初恋の人に笑顔が消えていた 貞 子 母となるうしろ姿にある威厳 笑 子 老いし母言葉すくない今朝の冷え 春 昇 木枯しへ女はミニ霜を穿かされて 政 己 この石の幾星霜を経た丸み 操 子 隙間風さえおきな子だった除夜の鐘 房 子 年越しそば好きな子だった除夜の鐘 房 子 独り者二階も下も灯をつけて 静 水 冬ある日波紋のままに凍りつく 葵 水 勝負とは別に人気のある力士 天 石 庵 凧あげをした原っぱにビルが建ち 那 の み

凸と凹そんなカップルかも知れぬ 蘭 幸 泣きべそへ鏡一役買って出る 千 百 合 今日も見ると鏡の私また変り 法 子 お小言の百より母の一滴 清 夫 カップルに引目感じる土曜午後 敏 夫 カップルへこれからつらい道もあり 凡 女 予約済言われてからをほしくなり 清 太郎 処女懐胎四季は狂いの無くめぐり 菁 居 南大阪川柳会 金井文秋報 好 奇 心 の 嘘 も た め さ れ る 柳 志 抱き上げた両手に父の血が通い 滋 雀 自画自賛する程うまいともみえず 柳 宏 子 見ぬふりも板についてる最古参 新 之 助 寡婦として生きる五十路の薄化粧 智 子 生きている錆へ民宿起こされる 小 松 園 ライバルを忘れてうまいと手を叩き 文 水 両の手に抱いて托児所より帰る 葵 秋 陸橋からずらり落ちそうな好奇心 一 二 三 ピアノ弾く両手リズムに酔っている 静 香 民宿の雪を待っている将棋盤 静 歩 好奇心いつかほんとに好きになり 好 郎 好奇心見出しにこそる週刊誌 肖 二 ここまでは好奇心と云う恋なりき 水 京 週刊誌にたきつけられた好奇心 恒 明 残り火の温みが残るお骨上げ 金 三 ペンだこの古参に事務を教えられ 誓 二 初任給アップ古参不服な貌となる 君 子 いらぬものつい買わされるうまい口 好 一 うまそうな見本覗いてつばをのみ 儀 一 先祖からある残り火だ油差す 喜 風 残り火のような余生にむちを打ち 圭 井 堂

うすぎたない好奇心もつのも男 凡九郎
 民宿の味は炭火で煮え上がり 岳人
 お隣りが気になり出した金づかい 綾女
 社長さんも一目おいている古参 あいき
 両手まで入れて話のはずみよう 頂留子
 むこうでもこっち見ていた好奇心 静馬
 民宿へ帰省のように来るお客一 栄
 プライバシーへ踏みこんで来る好奇心 牧人
 アベックの会話へそっと好奇心 千万子
 好奇から猟奇へはたく旅の金 章雅
 どんぐり川柳会(大阪市) 川村好郎報

美しい別れにしようと思送らず 比呂路
 指先がいちばん先に焦りだす 天史
 借別の命の指を組んであげ 修史
 民芸に一代賭けた太い指 好郎
 玄関がとうとう駅まで来た別れ 之保
 見送りはいつもここまでという峠 史好
 美容師の指美しくまかせきり 孝子
 指動くそこから茶碗生れけり 雄峯
 労災に冷たく嬉を評価され 郎詳
 ガラス玉それでも指し指になり 悦郎
 妻でない指にネクタイ直される 鬼遊
 落し物同時に見つけ瞳が出合い 儀一
 家計簿のピンチ料理の質が落ち 吸江
 妻の留守ピンチを救う子の貯金 凡吉
 彼の目を意識しながらキイたく 勝恵
 この指がみんな知ってるおれの過去 水陵
 見送りのムードをつぶす自動ドア 弥生

同人名簿作製のため至急に電話
 番号をお知らせください。

聴診器インタンらしい落しもの 酔々
 ロングヘヤー指で搔きあげ自由あり 痴亭
 心の乱れ指先定まらず いわを
 見送りは門まで別れの涙秘め 真砂
 出稼ぎを見送る政治には触れず 小松園
 どんぐり川柳会(羽曳野市) 川村好郎報
 職賭けでまで正論を吐く若さ 文江
 子に賭けてあげた風だが糸が切れ 酔々
 賭けごとくに遠く銀行利子はじく 酔々
 甘辛く酸っぱいような人生か 竜虎
 共白髪いのちを賭けた過去があり 吐来
 喜怒哀楽関わりのない馬の顔 桂馬
 ふるさとの味に遠かった縄のれん 一步
 まじわりの味の加減のむずかしさ サヨ
 Uターンふるさとの味噛みしめる 悦郎
 最後まで貴方に賭けた老女松 正博
 食べねばと願えど病床味がなく 晴人
 欲待が二級酒とわかる舌ざわり 好郎
 まるべに川柳会(大阪市) 川村好郎報
 退院を待つ身に水仙ほころびて 慶子
 マイペースたとえ風当り強くとも 一世
 春風に財布の紐もゆるみそう 節子
 気がつけば人生なかばの肌の色 寿子
 出な精もいそいそ出かける春近し 美枝子
 石投げの子等の足もと水温む 星斗
 沈丁花薫る露路へみちびかれ 茂児
 三寒四温下着脱いだり重ねたり 瓢太
 恋人を交えるたびに趣味が増え 幸子
 妻勢なネオン流石は大都会 扇里
 再婚へもうこりごりの顔でなし 好郎

八尾菜の花川柳会 飯田悦郎報

石段の手すりみんなの手でみがき 葵水
 信仰でない石段を登り切る 天笑
 石段の中途で気合いかけられる 茂笑
 石段を登れば妻は手をはなし 十郎
 温泉の町へ一夜の恋残し 弥栄子
 ここまでの線がい湯にとけてゆく フジ子
 小娘のかたる恋愛ほほえまし 好子
 赤軍派に娘まで混るとは知らず 悦郎
 青春を娘淋しく車椅子 柳志
 ろうけつ染め習うて娘まだ嫁かず 力
 馬よ手綱を解こうここはお花畑 まさお
 命綱平時は邪魔物扱いし 河産
 網不知こんな港が白浜に 栄
 右左ゆれてる日本の綱港なり 薫風
 一人旅切符は通し切符なり 維久子
 切符まで買わせておいて気が変わり 菜
 武蔵野で迷うた散歩蛇に遭い 雀踊子
 石垣のぬく味へ蛇が生きていた 酔々
 御陵を蛇安住の地と定め 鬼遊
 蛇皮線の糸が切られたままだ 小松園
 桜貝うれしく波に裏返えり 百酒
 ほら貝が心にしみる音を出し 岳人
 貝がらの俸せ女の胸にあり 葉子
 そむかれた女へ早い四季巡り 花梢
 残り火にピリオド打った巡り会い 久司
 野仏の花そのままに四季巡る 牧人
 唄にを鐘の余韻に包まれる 凡九郎
 まだ鳴っているやろかみおつくし 弥生
 満開の花散りそうな鐘の音 生

鐘樓に降り込められてるにわか雨 美代
釣鐘の音きき分けて京に住む 千万子
つば焼きの匂いもさせて客を呼び 竹荘
つば焼きを一個残してまだ飲む気 女
蛇の執念女はこわし妻こわし 茂雄
横着な切符を檢札見逃がさず 形水
和歌山七面句会 中筋三幸報

春斗の会議移った屋台日富源一
男とて号泣たし失意の田宮子
田植時寝たきりばあさんだけの留守
留守番と知らずくどくど説明し 政夫
交番の留守を守ってシクラメン 和美
熱燭を待てぬ男で憎まれず 昭伸
屋台店橋のたもとにある旅情 紅梅
留守番の父に一升あてがわれ 芳童
よく泣くがチンチンあるある男の子 勇次
どの顔もここが天下という屋台 昭子
留守番がピンチヒッター頼みたり 三幸
愛情をこぶしで泣いて男親 凡夫
これはまた定休日もある屋台店 幸雄
屋台店まだ飲み足らぬ腰を上げ 其夕
川柳わかやま 垂井葵水報

年始め消費しめると心しめ 佐一郎
春斗を先取りしての消費癖 佳宵
わが家の消費王孫に引きずられ 春亭
消費にはなじめぬ母の針仕事 富子
消費時代などと書ききたて買わせる気 まさ
旅先の別な消費は別に持ち 紀水
使い捨ての物な消費が悔どられ 弘生
もう捨ててくれなくつ下顔を出し 智
大正子消費の美德に染め切れず 里美
戎さん千円ですと念を押し 延伊知
思わない集金入りえびす顔 千枝子
戎さん福の勘定電算機 竜
二次会で女戎のちどり足 裕美
ポナスのときだけ妻の戎顔 ふみよ
消費ブーム明治の母にはピンと来ず 久司
不器用が編んだ手袋暖かい 佐知子
羨望の椅子に座っている孤独 千寿子
うらやます話と知って聞き流す とみ子
うらやましがらせておいて見せただけ 吉彦
スタイルの良さだけけなに羨まれ 守夫
羨まれ命ちぢめた宝くじ 城石
老骨の信心戎さんだけ頼り 昇
作業衣のまま袋首につけた残り 福陽一
ヨチヨチの手袋白し屋根の上 増蔵
ペンキぬる手袋白し屋根の上 美ち
役だたぬ片手袋を捨て切れず 正夫
消費とはこんな楽しいものと知り 太茂津
消費者は王様らしくだまされる 葵水
羨望を浴びて内幕火の車好郎 祥月報

和服着た別な魅力も見せておく 車楽
川柳塔まつえ 祥月報

底冷えが眠れぬ古稀の肌にしみ 小茶坊
妥協せぬポーズ背中に見せている 愚童
女には弱い立ち場に立つ社会 澄水
五十の分別じっくり足許をみつめる 軒太楼
日本のよさしみじみと高島田 喜夫
灯を消して童話が匂う月まるし 四希
三台のテレビみんなの趣味ちがい 雪代
先駆者の夢を裸にして文化 美
香水の美人が長屋へ越して来た 洋々
マドロスの酒は汚れた海なげく 通児
氣象台空の機嫌を図りかね 鶴丸
あこがれております命がけの恋 紅
命日へ今年も亡妻の好きな花 孤呂二
社会のアウトサイドヘニコン追いやられ 兎男
結婚選層受賞祝賀句会は忙しい 祥月
仮面一と皮むげば男牙をとぐ 水報

南海電鉄川柳会(大阪市) 辻圭
コンペアーにされ自動改札けつまずき 柳信
吸い込まれ自動改札追い出され 清涼
自動改札ただのりさんはしめ出され 摩太郎
自動改札はこらしそうに定期出し 圭水
販売改札自動にされて駅さむし 宏三
自動改札テロトにかいと見て通り 金子
自動改札発馬ゲートに入る感じ 誓二
川柳ささやま 河原みのる報
俵いま鼠の床置きとして遣り 蕪石
子沢山どう嫁ぐ気か親ねずみ 政次郎
餅をひく子どしの新春を許しとこ いそ女
天井のねずみ孤独をかきたてる 越山
転宅へねずみだけが放つとかれ 村雨
モルモット博士そだてた立役者 百合子

ビルに棲むねずみに帰る故郷がない
干支はじめネズミ堂々牙をとき
捕えたが鼠ひょうきんな顔でいる
さあ出発自動車エンコだ後を押
出発へ祖母梅干しの茶をすすめ
出発へ後髪ひく母が臥し
出発は着物に合わず初詣で
出発に泣いてくれたは財布だけ
仲人の扇子でめでたい荷が発車
再出発の二人に淡い試歩の庭
とんどの火もったいなくも尻あぶり
歳越し火あおい袴のすそが焦げ
目にしみるたき火の煙ミニに受け
金の要る話へたき火燃え続け
たき火の輪他人を入れぬエゴがあり

ゆきお 猪狩りの作戦を練るたき火の輪
竹堂 迎春へ命の灯火かきたてて
雅佐女 老いの袖焚火がひとり聴いてくれ
春峰 落ち葉たく孫に此の木由来説く
素水 ふるさとのシンボルが見えバス停車
弥太郎 純情のシンボルとして白を着る
一声 しあわせというシンボルを指にはめ
枝葉 求婚のシンボルの眼がきらめけり
近江 生き延びるきざしか酒が飲めるなり
昌宏 高知川柳社(高知市) 川竹松風報
呑鬼翁 嫁ぐ日を待ちかねての仕付け糸日
新ヤン うちかけて包みきれない幸で嫁き
掬水 隣席の晴着と比較して坐り
古仙 残り火のように衣紋にある晴れ着
娘の見合母も一枚買う晴着 伊津志
勝子

雅号ぶつちやげばなし(95)

かつえ



小野 克枝

おの

雅号を持っていない私がこの欄へ顔を出
すこと云うことは些か題に反することに
なりますが、本名即雅号が克枝です。原稿依頼を手に
始めて「ハテ私には雅号が無いんだナ」と云うことに
気付く程の呑気者ですが、そろそろ雅号が欲しいよう
な気も致します。これを機会に克枝が生れ変わる為の川
柳の名前をどなた様かつけて下さいませんか？

私に川柳をすすめて下さったのは川柳たましま社の
里風さんです。いつまでも御期待に添えない私ですが
仕事だけしか無かった私に作る喜びを与えて下さった
ことを心から感謝しております。忙中の閑を見付けて
白髪のお婆ちゃんになっても川柳だけは続けてゆきた
いと思っております。 石鹼化粧品卸業(四十二歳)

華美ですなマネキンもそう思い
空想をまた持ち越さず除夜の鐘
また除夜の鐘きく窓の闕病記
走る気にならず遅刻を覚悟する
盛り場を走る人ありふり向かせ
極楽へ行けますように初詣
正月の三日が早い三日の夜
一泊の湯の宿詩もなく呑み明かし
それとなく子が連れさせた妻の知恵
庭のあることが家賃に加算され
雑草の生える庭あり羨やまれ
石一つ据えて庭師の無口な眼
庭石の置き方ひとつ祖父がきめ
ホームラン怒られそうな庭へ落ち
川口弘生報

城北明朗会

花嫁を真赤にさせる祝辞も出
女の子生れて赤い色が増え
予想紙につけた赤丸みなどは
赤物が釣れたよ今日の芋頭
赤道直下浴衣で正月囃のよう
野仏の赤い前垂深い秋
国連で大国赤子の様にこて
黒髪をわざわざ赤く染めるやつ
テレビ見る喋る指先毛糸編む
大売出し損して儲かると女房
台所のぞいちゃいやと女房
長生きのお蔭で医療費免除され
寒風にやき芋の香りのって来
会いに行く日には口紅の色を
▼ご送句は二十句以内にして
人や購読者は掲載

本社五月句会

日時 五月八日(月) 午後六時
会場 以和貴荘(いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目
電話 622・1275 番

兼題 柳 話

「ストレス」
「麥身」
「音痴」
「沖繩」

席題 三題 当日発表
会費 二百円

★投句だけの方は切手50円封入

西井 垂井 葵
小浜 牧 水
八木 摩天 選
川村 好郎 選
各題三句以内厳守

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷仲之町20

川 柳 塔 社

6月の兼題 「港時」 「齒父」

・ 募 集 ・

七月号発表(5月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栞 選
近作柳樽(10句) 菊沢 小松園 選
課題吟(各題5句以内)

「小口」 恒松 町紅 選
「看板」 松本 忠三 選
「疑う」 小幡 里風 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

八月号発表(6月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栞 選
近作柳樽(10句) 菊沢 小松園 選
課題吟(各題5句以内)

「温泉」 渡辺 乱坊 選
「自信」 谷垣 史好 選
「ビタミン」 市場 没食子 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。



中野物産株式会社

本社 三橋 大阪府堺市入船町1-4 TEL.0722-41-1505
東京支店 東京都港区新橋3-11-9 TEL.03-425-2705
名古屋支店 名古屋市中区六軒町2-1 TEL.052-571-5694
福岡支店 福岡市上原町2-9-1 TEL.092-35-1411

定価 百八十円(送料十六円)

半年分 千七百七十円(送料七)
一年分 二千二百円(送料七)

昭和四十七年四月二十五日印刷
昭和四十七年五月一日発行

大阪府南区鰻谷仲之町〇番地
編集兼 中島 蓬太郎
発行人

印刷所 大陽印刷株式会社
郵便番号 五四二一

大阪府南区鰻谷仲之町〇番地
発行所 川柳塔社

電話 大阪・二七一―二五八五番
振替口座 大阪・三三三六八番

・ペンペン草

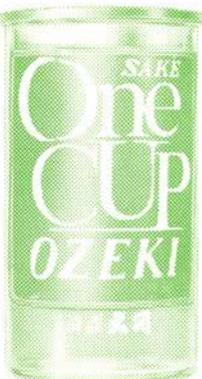
★五月は男の月!

★三月号は水谷氏に女流作家を書いていただいた。そこで本号では「おしどり作家」の奥さんたちに「ご夫君」をお願いした。

人気と実力で独走中



田宮二郎



清酒一級(180ml)「One Cup」ジャケッパックス5本入り

コップにはいったお酒

ワンカップ大関

大関清造株式会社



★劇主幹、現主幹ご夫妻も「おしどり作家」である。このほかにほくが知っているだけでも十数組あるが、ここでは現役カップル4にご登場ねがうことにした。

★おなじ趣味に生きる「おしどり作家」とはイトモゴ円満でうらやましいかぎりだが、ほくとききたらセンセーションである。ほくの匂ひでも手にとろうとしても手には新聞が放送に毎日どこかに拙作が出ていたのにも、読もうとも聞こうともしないのだ。

★むかしから、ほくの生活にも趣味にも干渉しないので、ほく自身はありがたいと思っている。これが今日ほどこへ行った?と例をして判にかけられてはたまらない。

★こどもの日にちなんで、創刊号から前号までのコードモを上体にした「こどもの匂」をさがした。もう一度童心

葉子コーナー

▼「毎日ポストをのぞいて楽しみに待っていましたし」とは娘の由紀子ちゃんからのたより。

▼モテるのは子供ばかりとはチトさびしいですわね。

に返っていたらどう。

★このらんでもたまたまび書いたが、米子の千代さんや瑞枝さん、島根の芳子さんに「松江の恋人」が親身もおよびぬお世話になった。

★千代さんは、初孫にめぐまれ、もし女児だったら、恋人とおなじように開子(ともこ)と命名すると云っておられたが、三月にその宝を得られ、しかも女児だったので、「智子(ともこ)」と名づけられた。川柳の縁のあたをかさを、こんどほど身にしてみ感じたことはない。

★天笑さんの幼稚園坊やの句まで暗記しているそうなので、えらいわ。

★川端康成先生は夫人に一行も書き遺さなかった。えらい方だ。(不二田一三夫)

純良医薬 第一製薬

うちみ・肩こりに

べタンと貼るだけ!

〈新型パップ剤〉

パテックス



● 140mm × 100mm 3枚入

タッチでえらべば
 やっぱりサコム



サンヨー電子式計算機

サコム
 SACOM

見やすい設計 ICC-162型 280,000円
 平面表示ゼロサブレス・%キー付き
 16けた2メモリー高級品

SANYO 三洋電機株式会社

南紀 和歌山 四国でのお泊りは

南海サービスチェーン

<ホテル・旅館>

◇白浜温泉

国際観光旅館 朝 日

国際観光ホテル ホテルパシフィック

◇勝浦温泉

国際観光旅館 中 の 島

◇湯崎温泉

国際観光旅館 湯 の 峯 荘

◇新和歌浦

国際観光旅館 萬 波

◇徳島鳴門

国際観光旅館 鳴 門

国際観光旅館 鳴門公園ホテル

◇紀北橋本

観光旅館 紀 の 川 苑

◇泉南淡輪海岸

観光旅館 淡 の 輪 苑

◇大阪なんば ホテル南海

お問合せ・お申込み 南海交通社
 日本交通公社・サービスチェーン
 大阪案内所 06-(631)-0222

南海電鉄